Title	Body of Academic resouces
Sub Title	Learning as a Human Action : Yamaga-Soko's Interpretation of the "Great Learning"
Author	阿部, 隆一(Abe, Ryuichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1953 新聞 No 20 (4052-2) - 402-240
Jtitle	哲學 No.29 (1953. 3) ,p.193- 249
JaLC DOI	
Abstract	Through a study of the experience of Yamaga-Soko (1622-85) as a scholar, who was one of the greatest Japanese Confusian philosophers in modern times. I Intend in this essay to study the aim, meaning and function of learning, and its methodology, and also to investigate the principles of learning — what the learning is, and how to master the true learning. In other words, I try to reconsider fundamentality the learning as a human action. According to the hithertho accepted classification, such a study may belong to Wissenschaftslehre or epistemology. In this connection if may be added that epistemology which is based upon the idealism of German philosophy is apit to be confined only to the study of systematic organization of speculation. The reconsideration of learning as mental science can not be treated as a mere study of the method of thinking. When we consider learning as a human action, the way of one's speculation itself is not a mere problem of one's method of thinking but a combined reflection of one's whole personality. The origin of this is thought and action is ascribed to the philosophy of life and the moral character of a scholar who is the originator of the study. In the Oriental tradition of learning, reflections upon learning are centred in seeking the way how to exalt the will. When a man does not learn, he can not know the way, and when he does not follow the way, he can not be a man. Learning, therefore, is the way of cultivating human character. It is the foundation, starting-point and conclusion of the embodiment of morality. Hence, learning in this sense is not so much Wissenschaftslehre in general as it is moral philosophy. Taught by the living example of Soko who embodied with above mentioned thoughts in himself, Lintend to describe what I have learned of him. He says that the literary meaning of Gaku-mon (learning) is "to learn" and "to ask". "To learn" arises from "to ask". Then what do we learn? As we are human beings, if we say, "to learn", we mean we must learn the way of man. That i

	there also lay the true merit of Soko who was a pioneer of positivism in modern Japan. He recommends the "Great Learning" to us as a book in which the principles of learning are described in the fullest details. So I have undertaken in this article to describe the problems in Soko's learning by studying his interpretation of the Great Learning which he read throughly. Contents: 1. Preface 2. Outline of Soko's Attitude to learning 3. The "Great Learning" 4. Three Principles of the Great Learning
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000029-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

問

山鹿素行の「大学」解

阿

部

隆

言

序

る。 修めるの道如何、即ち学の綱領を究明することを目的とする。人間の行為の一としての学問に対する全体的反省であ 本論は山鹿素行の学的体験を通じて、学の目的、意義、任務、研究方法等を講究し、真の学問如何、 か」る講究は西洋哲学の風に従へば、学一般の学、フイヒテの所謂学問の学問、知識学、 広義の認識論に類する 正しい学問を

かもしれぬ。

味する。科学の批判の立場に立つ哲学は此の科学の作業方法、 求することが学の標識である。 合理的統一を以てする一体系の構成をその主眼とする傾向が勝つてゐた故である。こゝにあつては、 哲学一般たるかの観を呈して来た。かくならしめた本質的要因は学を以て真理の体系と見做し、学的作業とは思惟の カント以後の独逸観念論哲学の学風は、やゝもすれば知識学がやがて哲学の同義と化し、哲学即認識論、方法論即 科学的研究とは或る対象を取扱ふ計画的組織的な研究の仕方で、言はゞ作業方法を意 科学の地盤を批判の対象とするが故に、 体系の完体を追 知識学は体系

闁

学

九三

盤上 その あり、 を得ない、研究対象に対する自己措定の地盤、実在に対する思弁的理論を以てする写象方法の合理性と可能性の論究 を一義とする学の観念に立てば、多少濃淡の差あつても、 これが許されるとしても、実質科学に於て許されるべきであらうか。況んや人生の学に於てをや。 し思弁の操作構成法如何によつては如何様にも真理の体系が成立し得ると極言できる。 はならぬ。 おかねばならぬ。元来実在の完き真相は把握し難い。実在の一局に執し、それを基礎として思惟の自発自展のまゝに、 れれば、その範囲に於てそれ一真理たり得る。併し諸科学の成立にはかくの如き事情あつて然ることを先づ領承して あるが故に直に真理と目する弊を免れない。よく称される学としての成立といふ言葉は、通例体系を統一的に成立せ S 学の不可欠の要件とされ、 しめるの謂 かの検覈は等閑に附され勝ちであるからである。壮厳深遠なる理論構成の体系の確立に急且つ偏せば、一貫せる体系 心題目となす。従つて学問論の中心は思惟そのものであり、思弁の操作の学と謂へる。理論的体系を構成することが そのものの必然的発展の仕方、 K 何故ならば、玆には研究対象たる実在そのものと思惟の合理的発展の構成所産たる理論体系が如実一体たるか否 理論発展の追求を事とする陷穽がある。 就中知識学は内容をも志向しながら、 論理密察なれば、 諸科学は研究目的の見地より研究対象に範囲を劃し、其の圏内に於て認識する。 である。 併しその体系とは研究主観の構成する体系である。それは実在そのものゝ体系とは一応区別 一体系を思弁上構成し得る。 その体系構成の思惟法の吟味が哲学の任務と考へ易い。従つてそれはいづれも思弁中心で 即ち思惟が内的統一を保ちつゝ自発自展して一体系を形造する体系の構成法をその中 思惟操作の形式に対する厳正緻密な工夫の範囲のみにとゞまるを免れな 体系を第一義とし、 所謂学の確立には一面実在を私見を以て措定し、 その学間論は自己私見の論理的必然性の合理化と為らざる 思惟の形式的論理性を重しとすれば、 形式科学たる数学には その知識が実在に実証さ 外面的形式的体系 自己定立の地 実在 カ> りに せね に対

に止まる。厳正高等な評言を以てすれば、 か」る意味の知識学は我見の合理的基礎づけ、 自己辯解の学である。 ح اگ

で問題の要諦となるのは、 思惟発展の形式と外形平板な論理性のみである。

行動せしめる、その由来する源泉は、 る時、 化 実践の完美を求めるには、実在のあるがまゝの真理に通ぜねばならぬが、その 為には思惟の 操作になる 体系的 の人倫 道の講究である。 下万物に応ずるには万物に通ぜねばならぬ。万物に通ず、是れ暗より明に、塞より通に己を進ましめる所以である。 研究主体者の学の動機、 心問題となるのは思惟の形式的原理及び論理、思惟操作の方法論に非ずして、学の方法論といふよりは寧ろ学を修 理論的体系の完体を描き構成するを以て第一義としない。 れ自体倫理的行為である。従つてかゝる学の反省は思惟の方法の論究に止るを以て十全となすことはできぬ。 て、固なく執なく実在の理法の体系さながらに随順する思惟の弾力あるを尊しとする。修己治人を目的とする学はそ に随ひ、 山鹿素行の学問はか 学問の学問、 所謂学の確立を不必要視し拒否するのではないが、 思弁の仕方も実は単なる方法の問題ではなく、 の大道の 接物応事に際し実践を正善ならしめるの明である。 明究に外ならぬ。 学の批判とは思惟の方法論の吟味から更に遡源して、研究主体の真の意味に於ける倫理性、 如何なる学法に則れば、 1る学風に対する批判から出発する。
 実人生に対する態度によつて分岐するものと考へざるを得ない。 学問の原理は人為るの道の実内容が準則となつて、それより必然的に導かれる。 学を行ふ行動主体たる学者の人生観、倫理観に帰する。 人生の道を完くし得るかである。 その一々は主観自体の人格の綜合的反映である。 殊更必要とし第一としない。学の研究を人間 併しそれを拒否排斥するのではない。 敢て思惟の論理性と言ふならば、それは天機を漏さずし 実人生に対処する実践の学たる実学は思弁の操作による 従つて学の筋道を正すことは即ち実人生 人生 を 対象とする学の立 学の正邪は畢竟する処、 要とする所は時 の行為とし かく考へかく 志の如 兹に中 組 て観 処位 める 天 織

此が素行のみならず、東洋の学の正統と言ひ得よう。しかしてかゝる立場に立つ学の綜合的反省が、人生を研究対象 実に完うするの道であり、学は是れ人倫修為の法である。 何の吟味検覈がその中心となる。学の思惟の形式的方法論に非ずして、学を修める精神そのものが問題の中核をなす なすものである。寧ろ、学問の学問とは綜合的には知識学と云はんよりは、此の意味に於て倫理学たるべきである。 のである。 とする精神科学並に哲学の真実の意味の認識論の方向と信ずる。哲学が常に全体の立場に立たねばならぬとすれば、 であり、地盤であり、出発点である。従つて学問の綜合的自己反省、学筋の正糾は倫理学を成立せしめる根本規定を 層然りと言はねばならぬ。 人学ばざれば道を知らず、 道によらざれば人と為るを得ない。人倫は教学によつて立ち、 かくの如く学問は実践修為の上からは倫理を実にする基礎 学問は倫理を現

道に新旧はなく、古今東西に通じて易らざる唯一の大道あるのみなるを忘るべきではない。道の正糾とは忘れ外れ迷 が高い、併しそれはあやまれる旧に対して新と称し得ても、全く新しきものと言ふ意ではない。学の大道、天地の公 きつた学問の道を詳しく論議せざるを得ないのは、破邪顕正の要を認めるからである。現今新しい学問の道を望む声 は絶えず後に伝へるといふのが精神科学の本質的性格と任務であるは言ふ迄もないが、他面、此の明かにしてわかり に際し、自己自身の箴誡を立てんが為に草したにすぎぬ。原理論をなすのは一は教へて倦まず、先人の道を継承して 敏にして以て之を学び、教へて倦まざるのが精神科学徒の常に堅持すべき態度である。本論はもと、筆者が学を志す 領大道といふ如き原理原則は今更事新しく立てらるべきでもなく、又その必要もない。それは既に業に東西の古聖賢 の明にし、先人のひとしく伝へて践み歩みし古くよりそなはれる道である。述べて作らず信じて占を好み、古を好み 事物の根本原則、綱領を立てる如きは古今東西聖人天才の分とされてをる。学の綱領も亦その例を免れぬ。学の綱

る横道小径より大道公路へ復帰する自覚的行為である。目ざめたる主観の眼には旧なる客観の森羅万象も新に映ず

る。 て」に生命の神秘的不可思議があり、 不断の創造の源泉がある。

以上の所論を身を以て垂示した山鹿素行を学者の典型、 立志の模範として、素行といふ具体的人格の体験に学び、

学び得たところの筆者の思想を直敍表現しようとするのが本論の敍述である。

学士院」への研究報告)並に「倫理の成立― 句読大全」は「句読」と略記す。「山鹿語類」と「謫居童間」とは、引用瀕繁なるを以て、引用書名を全然省略、従つて出典の 明記のない引用文は全て、漢文は「山鹿語類」(聖学篇)、和文は「謫居童問」よりの引用である。 し、本稿はそれとの重複をさけた。両篇と相互に照合さるべきものなり。 の他は全て、国民精神文化研究所編の「山鹿素行集」本に拠つた。本文中の素行の引用書は「聖教要録」は「要録」と、 本稿は素行の宇宙・人間・倫理観を参照すべき点多いが、 それに関しては、 拙稿「山鹿素行の中庸観」(昭和十八年度 本稿に使用した素行のテキストのうち刊本のあるものは、 ―山鹿素行の性・道・教の解」(「大倉山論集」第二輯収)に論及せるを以て、割愛 「山鹿語類」は国書刊行会本、 「四書句読大全」は国民書院本、そ 「四書 一帝国

、学

問

面 の伝統に立つてゐる。 る。しかしながら論述の便宜上、最初に素行の学解の大体と結構とを明にし、且つそれによつて大略の見通しをつけ ると共に、更に詳しく論究すべき個々の問題を予め設定し度い。素行の学は実学である。その学の根柢は儒教的教養 のあることは言ふ迄もないが、 山鹿素行が学問を如何に解したか、 儒学が、 他の学特にギリシャに端を発する西洋の学とその立て前に於て根本から異にしてゐる 同じく人生を対象とする学たる限り、その堂奥真義に徹到すれば、彼我相ひ通じ、共 学の真義如何は、 本稿全篇を貫く問題で、本稿の終末をまつて始めて明にされ

を明求究尽する見地に立たねばならぬ。 学風の独自性を明にすると共に、外面の相違にもかゝはらず内面を流れる古今に通じ中外に悖らない唯一の学の大道 に学の目標と精神を同じくしてゐる点も亦否定し得ない。我々は歴史風土の条件によつて自ら規定される各諸民族の かくすることが素行の学の本領である。

要とする。覚悟は単なる知識の集積では能くし得ない。我が国語に於ては、「学問」は「まなぶ」である。「まなぶ」 のか。 ては、 「大言海」によれば、学問は「学ハ増韻『効也』説文『覚悟也』、問ハ、説文『訊也』トアレバ、事ヲ效ヒテ、其ノ理 開発である。学は先づ問ふことから始まる。問が学の出発点である。問ふ所以は自己の無智なるが故である。 ふことである。又、学は知識を学び之を聚めるが、それを以て終極の目的とせず、問ひ以て之を弁じサトルことを肝 ヲ覚リ道ヲ訊ネテ、疑ヲ説ク義」とある。易の文言伝には、 為であつて、それを離れない。学問も倫理性を徹上徹下一貫始終し、 にせんが為に、謹んで教を仰ぐ。「謹む」といふ厳粛なる道徳的意義の加はつてをることに注目し度い。東洋にあつ だす義。 手を拱きし貌にて謹む義、且つ臼(キョウコク)を音符としてゐるのである。 といふ行為の実相を生き/~と髣髴せしめるものがあつて、示唆する所が多い。学問は啓蒙であり、 元来「学」といふ字はマナブと訓じ、古文の本字は「褩」である。 学ぶことそれ自体が道徳行為の初発である。問ふ所以の動機が学の真偽を決定的ならしめる。 無智を開き、マナビ覚る意を表はす。故に教(をしえ)と「(上より覆ふ貌にて愚なること)を合す。 人生を正実ならしめる為に問ふのか。志、 故に口をかく。 転じて一般にとふ義とする。学問の此の字源は、正に学問の本質的性格と構造、学問をする 初一念の検討が学の出発点、否不断の反省とされる。 「君子学以聚」之、問以辯」之」とある。 倫理体系の一環として存する。 「
勢」は
教と
「と
日の
合字
で
此の
字形は、 「問」は、本義は訊問の問で、とひた 学の始源は、数 興味慾から問ふ 閉塞せる自己の (後述参照) 学は倫理的行 愚を賢 日は両 教を

る。 学問:」(崇畯紀) び此等三者の相互関係を行動主体の動態過程に即して考察しながら論を進めることにしよう。 を「ものならふひと」と言つた。此等の字源と語義は、学問そのものを考察するに際しては、本質的なるものを教示 は であらうか。本論は学問をする、学ぶといふ行為動作それ自体と、その学の対象、学的行為の所産としての成果、 と現在、先輩と後輩、 してゐるのであつて、 か。又、 るであらう。 「まねぶ」から転じたので、真似て習ふ意である。「名義抄」には、 「此歌は昔仲麿を唐土に、 実際に於て学問は如何にして行はれつ」あり、 しからば学ぶとは、 の如き用例に徴しても分かる通り、 軽々に看過し得ない。以上の字義から、学は教に、問は答に相ひ対し、 社会と個人とが学問に於ては相ひ対し、 物ならはしに遺はしけるに云々」(古今集九、 此の世に生をうけてから死に至る 迄の人の行為の 如何なる 領域を 指すのであらう 学問と書いて「ものならはし」「ものならひ」と訓じた。 何を指して学問と称するのであらうか。見習ふべき対象は何 相互に予想し合ひ、 「学、マネブ」「学、モノナラフ」と出てを 羇旅)、「付二百済国使恩率首信等、発二遣 両者相合して学が成立するのを知 賢と愚、 師と弟、 学者 過去 及

学ノ字マナブトヨメリ。人生無不、在、學 」在」学。 素行はその著 別家二置、 Æ 都二居テハミヤコノ音ニウツリ、其ツキ~~父母乳母ノ、モノイ、、ナスワザヲナライ、 クルイタワムル 幼少ヨリ人トナルマテヲ考ヘシ。 側 ノ者ミヤツ 商居童問」 学ハ、我不」知不…心得」ヿヲ、 作法、 カエ の開巻に学問とは如何との問に対して先づ次の如く答へてをる。 ノ輩マテエラヒ、 見聞スル処ニウツリ、 其子智恵ツキ物ヲ云事ヲイタス時分ニナリ テハ、 飲食衣服ヨリ、 ツイニ我本性トナル 其シレル人、 其ナスワザニ、 ヨクセル人ニ学ナラフコ 也。 法則ヲ定、 古 ハ子スデニ胎内ニヤ 胎教ヲ立、 ト也。 飲食衣類モテアソビ 田舍ニ居テハ田舎ノ 人生レテ無」不 生レ ŀ ナカ 時 ラ形 母ヲ

問

容端正ナランヿヲ求。是学ト云ヘシ。心ヲ不」付ユエ、是ヲ学ト不」知也。 況ヤステニ生長ノ輩、 其学ナラフニヨ ッ

テ善人トナリ悪人トナルユエ、学フト云ノオシエ、尤可ゝ慎つ也。

用ヲ詳ニスへシ。不」知ヿヲオシテイタスハ、仕アツルコアリモ危シ。古ノ聖人モ好」問トイへリ。(巻一) 次ニ学問ト云ハ、学テハ問、好、問祭:邇賞: 問テハ学ファ也。 何事モ心ヲヤワラゲ其道々ニ明ナル人ニ学ビ、疑シキ所ヲ尋問、 其

素行は性を「能感通知識」と言つてをる。性とは生命の生々無息なる所以の名で、 持された集積が経験又は体験内容である。 は根源的には生を完うすべき目的と要請より経験を収得することであり、 遍的通用享有に供される見地から、 神作用に至る迄をも包含する。 る。生々息むなく感通知識することが生けるしるしである。 される。 る作業である。 生ある限り、 学問は此の体験に基き又それについてなされる思慮判断であつて、此を離れてない 念々動いて息まざる意識活動によつて収得された全内容が結合聯絡統一せしめられ、 性心の妙用によつて、 一般に知識と称せられる。学問とは最も原本的意味では知るといふことで、それ 個人のみならず全社会全人類の経験の成果が整理客観化されたものが、 事物応接の間に万物を感通知識して身を処する所に生命が完く 感通知識といふ中には低級な感性作用 又その経験し体験したことについて問ひ考 性の妙用は感通知識することであ から高級精妙な精 身に把 普

間入りをして生長し、庭訓や環境の影響を受け、学校に入つて知識を授けられ、文字を習ひ書を読み、 聞き真似の間に、身辺の人々の動作をみならつて自らも行動し、社会の風俗慣習に随つて生活法をならひ、 はすに至り、 み取らうとする。 母は未だ言葉も解せず物心もつかぬ嬰児に向つて話しかける。 物心がつき父母兄姉近隣の人々等の顔を見知り、 此の母子の精神交通のうちに、 いつのまにか嬰児は次第に言葉を解し、 遊び戯れのうちに、智慧づくと言ふ言葉さながら見様 無心の愛児の表情の一つ一つにも喜怒哀楽の情を汲 片言まじりながら会話を交 知識見聞を広 人倫 の仲

問はず、悉く此を素行は広い意味で学問と称してゐる。かくの如く学を解するならば、今日普通の学の定義たる体系 化されたる一切の知識、真理の追求といふ意味とは大に趣を異にする学風の必然的に発展するのを感ぜざるを得ない 実上不断に無意識裡にも為しつゝある日常生活不可欠の知識技能の経験収得作用を、意識的たると無意識的たるとを る。 であらう。素行の学問とは今日の術語を以てすれば学習(Learning, Lernen)の方が適当であるかもしれない。従 め つて学問は必しも読書を必事としない。読書を必とする学問に対する観念を先づ棄てねばならぬ。 からした学んでは問ひ、 業を修め実社会の職業に携はり、年齢相応の功をへ、 思慮分別 を 積んで生活して行くのが我々の体験過程であ 問うては学ぶ日常卑近の、人たる限り何人も程度の差こそあれ、 為さざるを得ない、

羅万象悉くを究めようとするのか。素行は人の学を為す所以、学の目的、学の対象について次の如く述べてをる。 る。併し素行の意味する学問の事とすべき対象は何であるか。いかなる立場に立ち、いかなる見地の上から宇宙の森 聖―学何_為乎、学:為、人之道:也、聖―教何_為 乎、 教:為、人之道:也、人不、学則不、知、道、生―質之美、知―識之 敏、不」知」道其一蔽多、(「要録」) しからば学ぶとは何を学ぶのであらうか。五官の知覚の対象たるもの、認識され得るもの一切は学問の対象たり得

問である。 素行は亦「学フト云ハ、我乃人ナレハ、 人の道ヲナラフヘシト云ヿ也。」と言つてをる。 教の内容も学の対象も悉く とは五倫の間に天地万物の中にその生を完うすることである。生を厚くし性を尽さんが為めの用を悉く学ぶことが学 人為るの道にきはまつてそれを出でない。人と為るとは人間として此の世に現実に生きることである。現実に生きる 学何為而興、学言為人之道」也、 言ふまでもなく人間とは自然的生理的意味のそれではない。文化的精神的のそれである。人と為るとの為 教何為而設、教1,為1人之道1也、故聖賢各以1学1道称焉、

「人皆有:1睎、聖之志:」(「要録」)、人の目標は聖人である。 人為るの道とは儒教流の表現を以てすれば、 学問の理想的標目が具体的に明瞭とならう。素行は聖人はあくまで人であつて、奇蹟もなければ、摩訶不思議の神通 ば、その聖人といふものを先づ詳に知らねばならぬ。聖人といふ概念を明確にすれば、素行の人間の理想型、従つて きでない。しかも此の世に人として生を享けた以上、人間は凡人を目標とすべきではない。その至善を尽してその生 るといふ意には必然的に積極的理想的努力の意義がこもつてゐる。それは天然自然にまかせるのでなく必然的に人間 べてゐる。 力のあるわけでもなく、無慾清浄の世捨人でもない。素行は常に人倫の間にあつて考へる、聖人について次の如く述 道である。 を完美ならしめようとするのは生きとし生けるものゝ深く本性より発する已むに己 まれぬ 内面必然の要求である。 の努力即ち育成存養、学問教育の不可欠なることを前提とし予想してゐる。「人」といふとき常にこの一点を忘るべ 故に素行は聖学と言ふ。 このやらに素行は学の標準は聖人にあり、 学ぶとは 聖人を見ならふといふなら 聖人に至るの

其人品ヲ云トキハ、温良恭倹譲也。君ニ仕ヘテハ能礼ヲ尽シ、父ニツカエテハ能孝ヲ尽シ、文事ニハ文章明ニ、武 蓋聖人ハ只人倫ノ至極ニメ全ク人ニカワレルコナシ。人ノ人タル道ヲ尽ソ、能事物ニクラカラズ、更ニ惑コナシ。 与、可↘施寸ハ恵、オシムヘキ寸ハオシム。其言行更ニ形ノ名ツクヘキ処ナシ。(巻一) 義ニハ武備全ク、温ニメ厲カラズ、威アツテ不」猛、勤へキ寸ハ勤、休へキ寸ハ休、可」取物ヲトリ、 可」与モノヲ

又「聖教要録」には同様の意味を述べて曰く、

て礼に中る。其の治国平天下や事物各々其の処を得。別に聖人の形を謂ふべき無く、聖人の道を見るべき無く、聖 聖人は知ること至りて心正し。天地の間通ぜずと云ふこと無し。其の行や篤ふして条理あり、其の応接や従容とし

人

nsch であるから、その行状は「聖人は中庸のみ、得て称すべき無し」(同上)と言ふより外ない。聖人とは即ち Ganzme-聖人は一行一善の称すべきなく、一曲一技の士ではなく、此に偏せず、彼に泥まず、たゞ人倫の至極を尽すのみ の間に於て把握しようとする。 の謂であらう。 この聖人観には素行の思想の顕著なる特色がよく生々と躍動してゐる。 かくの如く学問の中心問題は人間である。 畢竟学も人と為るの道を繞つてのと あくまで素行は全てを

人の道より上なるも下なるも共に学の邪道とするのが素行の学問の特色である。

問である。故に此を実学といふ。学問事業その效を殊にせず、学問と世間は別個のものではない。 世間以外にない。真実に生きるといふこと、それ自身が学であり、如何にして正善に生きんかの努力、 行は、「聖人之学、 生活である。 美ならしめるかに帰着する。かく一点に帰着せしめて学ぶのが学問の道である。 るといふ言葉に人事自然万般一切を包含摂持してゐるのである。併しその要とする所は我々の生を如何にして正善完 に対処する万般の要務を惑ふことなく通達せしめるのが学である。 日用の学かと、 立場から為され且つ観られ、日用実践の一点に求心するのが実践の学である。日々の用を十全に弁ずるのが素行の学 その生を完らすべき為の用は、考へれば考へるほど、その範囲は限りなく広く、その内容は限りなく深い。人と為 又実践の道を求めて如何にすれば我々の生、是れ正善を得るかと学ぶのが学問である。学問は悉く実践といふ その外にない。 曰く、 唯在11日用之間、能窮11尽日用之歩々、不1紊11其節目、本11其綱領、是学之序也」と。 「日用者百姓日用之謂也、学者效覚之称、日用之間、皆是效覚来底也」と。 しかれば、「以」学為、日用之工夫」」と言ふのである。それは換言すれば、 依て学は是れ日用に習熟するの謂である。 我々の生きるとは日々時 学の 日用事物応接の間 又如何 それ自体が学 研究対象も実 日用の実践 々の現実の 故に素 か是れ 0

想的超世間的なるものを追求すべきではないかと言ふかもしれない。それに対し素行は次の如く答へる。 の工夫である。 さうならば学とは単なる卑俗な生活技術の習得に堕するのではないか。 日用世俗は卑近細碎、 学は理

ラズ。 又世々ニト 教ト云へル也。中庸ニ、天下国家可」均也、爵禄可」辞也、 トイへに、世ニコレヲイタス輩スクナカラズソ、日用事物ノノリヲ心得、 聖人ノ教ハ、専ラ日用ヲ事トス。日用ハ小事ナリ、近キ事ナリ、ヒキキコ也、下学ナリ。 ト云ハ、日用事物ノ間、 ココヲ以テ云ハ、君ニツカエテ忠ヲナシ、父母ニツカエテ孝ヲツクシナンハ、人倫ノ大義ナリトイヘモ、是 朩 シカラス。 中庸ニ相カナフノ心ナリ。 事物ニ中庸ヲヨクセンヿハ、ツイニ難」叶ヿト云ヘキナリ。 天下国家ヲ均シ、爵禄ヲ辞シ、 白刃寸、踏也、 第一ノツトメナリ。(巻二) 中庸不」可」能也ト出タリ。 コレニ相合コトク仕ル人ハ、 白刃ヲフムハ、其 サレハ学者ハ 小事 タリト コレヲツクスヲ、 中庸ヲ能スル ノ事甚大ナリ 古今ニ多カ 聖門ノ 云

る態度の如何にある。 意味で素行の実学はまた聖学である。世間の中に出世間がある。 である。それは単なる生活技術ではなく、それを含んで現実界に大道の原理を通貫具現せしめるのである。 具現の場も対象もあり得よう筈がない。日用の提出する問題に最も理想主義的見地から解答処理するのが聖学の工夫 日用卑近を厭へば、 現実の生はない。 故に日用は是れ、 理想の追求とは日用をして至善に止らしめるにある。 「近浅遠大、 更不言支離、 卑近深遠は対象の区分ではなく、 至近至浅須二究研、而其裏面是遠大底」である。 日用を離れて理想追求 それに対応対処す 故にこの

压

コ

レ

ヲ

コ

7

カニ格致ノ、ソノノリニ合コトク可」心得つ、

学問之極、 有,用法、不学之徒、 唯在、窺言致其事理日用」也、 亦未上嘗不上為;這箇之用、是自然之勢也、其間聖人大立」道設」教、而今上人各知是我異;於禽獸 凡天下之事物、 各有二必然之理、出入起居、 応、事接、物之間、 皆有二事理、 かれば学問

の究竟処如何の問に素行は次の如く答へてをる。

都 能討論来、 学教之究竟、唯在言這裏面、故学者自、大至、小、詳窺,其理、其所、為所、用、随、処提撕、 五 倫以敍、 一事一件之微少通、亦制11判断作略糺明、其燭」理末」明、心有11其惠、致」知未」詳、 以二大綱領一正」之、使二一日之間、漸次整頓、 品物以亨之由、若不、知,,聖人之道、則燭、理不、明、互利随、好、飽食煖衣、不、奪不、饜、豈異,,禽獸,乎、 得言日積月累、 自然純熟、自然敦化、学之功不」可以求」速 有上如」得二其才一者公 随、事収拾、 随,時体究、 唯好辨利

کے Ŋ 対人的見地より己を修め人を治むると云ひ、 人の実践の万般は一身の行動の事物応接に従つての範籬であるから、 対事物的見地より事を治むると云ふ。 行動主体の立地 より学は身を修めると云

口

其功竟至、術、

学者之究竟、

豈出,此外,乎、

分化する調査研究も、 通ぜざればかなはぬ。故に「学者在11博通、故修」身治」人之間、詳問細效而無」不」通」、是れ学である。依て博学の目 ち知識を求め ぜず多く事に接して泥著せざるを得ない。是れ聖人の学ではない。学問はあくまで博通を重んぜねばならぬことは言 用につながり、その関聯に於て其の所を得る。固陋にして寡聞、独坐便了して事情を晄る所なき如きは、 的も実践を目的とする以外にあるべきではない。文化の進展と共に増加する一見現実に迂遠の如く見える微細に専門 直相を明にするを目的とするにせよ、 に亙つて講究するのを学問とするのである。人事の範囲は広くして深い。人倫の用を完からしめんが為には、 かくの如く、 んが為に知らんとして問ふか、 常に実践の見地立場から、実人生を、小は挙措進退より、 学は問に始まると前に言つた。問はざれば新ではない。 研究主体の主観に於て直接の実用を目的とするか否かの問題とは別に客観上からは終極には日 此の動機の毫釐の差は、学の様相をして千里の隔絶を生ぜしめる。 実践の動機より問を発するかの差異がある。 併し問の動機にたゞ事物を知らんが為に、 大は経世安民平天下に至る人生万般の範囲 結果に於ては同じく事物の 前者は知識 皆事物 万物に に通 即

、みの魂のぬけがらである。実践の志に摂せられる時、それらはその所を得て、その用をなすといふのである。 శ్ర ない。 間其の世界を異にするのではないからして、学の行蹟は日用飲食衣服動静応接に於て世人とその外形を異にするもの 問の学は以て人の師となるに足らずと云ふ。併しそれは博文記問詞章を一律に不必要として排するの意ではない。そ 問と称する。 亦似」同,於愚人,而其間太有,差別,万物並育而不,相害,道並行而不,相悖,者,天地之大也,中庸三十章 面性そのまゝに即するからして、主体性が生々と具体的となる。身に近く思ふのである。依つて此を己の為にする学 践意志がないからして、自己本来の内面性を外れ、 は後述しよう。 益なき究理はい 人生の複雑分殊は一円相に循環融会一貫され、分殊を究める学も完き一の実人生さながらの秩序と体系を帯び来るの 云ふのである。人為るの道を尽す如何の命題に学は出発し、 ではない。たゞすなほに人為るの道を尽すのみである。「尽す」といふことが問題の中心である。 れは学ばず習はずしてはかなはぬ重要なもの重んずべきものであることは言ふまでもない。 められないのである。それは何故であらうか。本問題は精神科学の認識論の中核たる問題である。此についての詳細 の為に知識を求める知識慾であり、 依つて此を古来人の為にする学問と称する。此に反し、実践意志に発してそれが通徹渗透する学問は、自から内 実践の学から見れば、此を邪道とし、それどころかかゝる知識は、最高深義の意味からはその真理性すらも認 日用に因らずして学を論ずるを異端とする。 従つて 記誦詞章の学は君子之を学と為さぬ。「学記」に記 知識慾のまゝに博学を事とするのを、 か程細緻精妙を尽さうと、それは見る目に面白く思弁の玩びにはよからうと、 後者は日用の正善を求める実践意志である。実学の問は実践より発する。 身に切実ではない。即ち外面性の装飾であつて、 素行は雑学或ひは俗学と名づける。此は身を修めようとする実 それが究極の地盤である。此の一点に終始してこそ、 たゞそれだけでは手段の 大本からは尊ぶ所では 聖人何異言於世言乎」と 然れば乃ち「聖人 主体性が喪失す 学問世 日用に 実

ある。感を感じ惑と意識するは自発的な学問の第一歩である。しかれば先づ惑とは何かを知らねばならぬ。素行は「学 者各心知ノ物ニ惑フ所アツテ、不」通ヿアルユエンヲ不」知。ユエ事物ニ当テ、 是非邪正ヲ不」弁也。(こ) 以テ憨ヲ治ルユへ、遂ニ至大至公ニ至ルヿヲ不」得。聖人ノ教、弁」惑ヲ以テ要トス。 惑ヲ不」知寸ハ学ノ標準タツへ 実を得ない。故に「此惑ヲ不」知ユエニ、是ヲ修スルヿヲバ不」得シテ、或ハ惑ヲ以テ正トシ、或ハ誠ヲ以テマドイト 始終ヲハカラズ、当座ノ思出ル処ニマカセテ径ニ行ノヿ」の謂である。正善を知ることゝ惑を知ることゝは表裏循環 過と云ひ、不及とは「疎略軽卒ニシテ大ニ簡ニ陥ノ惑也。大簡トハ、詳ニ不」考、敬テ不」思シテ、先後ノツモリナク その惑とは「過ト不及ノニツニ出」る。「定レル誠ノノリヨリ厚ク過ス寸ハ、泥著シテ必附益助長スルニ歪ル、」是を ルニ、学者ノ先務惑ヲワキマフルニアルヘシ。」と、学問の道が其の実に至るの先後は惑を知るにありと言つてをる。 である。惑ふが故に問ひを発して積極的に学ばうとするに至るのである。惑ひを自覚せざる者には問も学もない筈で 無くなるのを学の目標とすべきであらうか。素行当時の思想界の風潮は其の惑もなき無慾清浄を人間の理想として描 ス。異端ノ邪説暴行、全ク惑ヲワキマエザルヨリ起レリ。惑ヲ不」弁ハ、是ヲ非トシ、 非ヲトラエテ是トシテ、 の関係をなす。過ると不及とを知つて、中の工夫とそ聖学の大眼目である。此等の実を弁知しなければ、学問もその カラザル也。」と。それならば学の至極を尽せる境に達すれば、日用の間何の惑もなくなるのであらうか。 かくの如く学は日用の間に正邪是非公私の差別を弁知するにあるが、此を知らうとする動機はもと惑ふ所あるから 素行はかゝる仮構的人間観に次の如く痛棒を食はしてをる。 コ、ヲ以テ案ス 惑が全然

次ニ去、惑ト不、惑ノ心得アリ。去、惑ト云ハ、可、惑モノ去捨ルノ心也。是聖人ノ教ニアラズ、多ハ異端ノ沙汰スル(タ)

て也。聖人ハ不↘惑ト教玉フテ、去↘惑ニ不↘及。唯惑ヲワキマエテ、 不」惑ノミ也。 惑亦人ノ情ニシテ、人々木三学

無川此惑。唯惑ノ中ニオイテ不」惑コトク可」修也。

是ヲ去ノヿヲ不」曰。是惑ヲ能シレバ、不」可」惑ユエ也。惑ヲ詳ニ不」知ハ、惑ト云、正ト云、共ニ惑ニシテ、 上ニアルコ也。 後儒唯惑ヲ去ヿヲ詳ニ説テ、 弁」惑学者ノ要タルヿヲ不」尽。 夫子ハ 只惑ノワザヲツクシ玉フテ、 二不」有也、不、辨、感則曰、惑 次ニ弁、惑ノ説、詳、論ー語。樊遅・子張ガ疾ニアタツテノ玉エリトイヘモ、 其言ノ切ナル処、 皆惑ヲワキマフルノ 実地

ルニアリ。知恵明ナル寸ハ邪正是非不」可」惑。知恵不」明ユエ、其惑ヲ不」知也。」と。しかして惑を弁ふるが為には、 べきである、従つて、「学是可」弁」惑為也。学フトキハ惑自弁ツベシ。 学問ハ自己ノ知ヲミカイテ、 己ヲ明ナラシム 「事々其道ヲ不」尽ハ不」通ヿ」である。 「惑亦人ノ情ニシテ」と云ふ素行の事実の脉絡のまゝに従つて微妙なる考察を進める柔輭にして弾力ある思想を味ふ

る時、主として読書が中心となり、学文即学問の観を抱くのが普通である。しかれば学文と日用との関係はどうであ 悌、謹みて信あり、汎く衆を愛して仁に親しみ、行ひ余力あれば則ち以て文を学べと教へる。併し我々が学問と称す 素行の実学は日用を急務とする。 日用の外に学を求めるのではない。 孔子も弟子入りて は則ち孝、 出でゝは則ち

ヲ考テ、身ヲ修メ人ヲ治メ、天下国家ヲ政タルタメシモヲ知テ、今日ノ身ノ上世上ニ引及シ、日用ノ知恵タラシム 次ニ学文ハ、我ニイトマ多シトイヘル、尋問テ学フヘキ師ナクハ、古ノ聖人ノ書、 賢人ノ 言行、又ハ 世々ノ 記録有派の 学女

ル、是ヲ好」古氏学」古氏云ヘリ。是等之類学ト云ヘル教也。

らうか。素行は此に関し次の如く述べてをる。

あり、 要有力な一手段である。実践の全きを欲すれば、必然的に古今東西の全人類の体験を参照尽究せざるを得ないのであ る。 が直に学の目的ではない、此の本末を混淆顛倒してはならぬ。学文は体験を豊富にし且つそれが正鵠を期する最も重 を除いて学問は考へられない。 故である。普通学問が読書と宛も同義の如く解せられるのも無理もない理由がある。現今の我々の生活に於ては読書 内面的発展の心理的動機に於ても亦重要な意義が存する。読書に向ふといふのは何らかの意味に於て意識的な学習で するに他ならない。 けると同様である。ここに読書といふことが人類の全体験にとつて劃期的な役割を果すのである。直接の見聞会話は であらら。文字を解することが、個人の体験形成の過程にとつても亦最も重要な要因となることは、人類文化史に於 す通りである。従つて文字を知るといふことが学問の手始めと考へられ、文字を知るのが博学の鍵と考へるのは当然 次に製紙の発明、 且つ有道について正す生きた人格と人格との直接の交通が終局には決定的な価値を有する。 一定の狭い時空に限定されるが、文字によつて固定永久化される時、時・空の制限は著しく開放され客観化されて来 学問は人間相互の日常交際の間の直接見聞によつてなされるのが、最も原初的にして又最も根本的な方法であり、 全人類の体験内容文化財の交流相続開展は書籍なしでは到底不可能事である。併し書を読むのも体験を博大拡充 その心的態度には無意識のそれとは異なる要因を帯び、単なる常識の域を超出しようとする傾向が萠し来るが 其の後の交通機関と印刷術の進歩によつて一般に驚異的な普及と向上を見たことは近世の歴史の示 しかも読書が体験形成の過程に劃期的であるのは単にその效果の方面にのみあるのでなく、他面、 特に精神科学に於ては然りである。 併し読書・学文はあく迄学問の一端であり、 併し知識は文字の創造、 学文

_者載:|古-今之事-蹟|器也、読書者余-力之所\為也、措\急-務読\書立\課、以\学為\在|読書|也、 学与、日-用打-

る。

それは文字文献を通じて始めて可能である。故に素行曰く、

格、是唯読、書不、致は、道は也。

すべきではない。余力あればと夫子の言ふのは、学文をどうでもよいと言ふのではなく、以上の如く読書の本義を反 ざれば書を読むも亦空文である。学を志す者常に「今日ノ身ノ上世上ニ引及シ、日用ノ知恵タラシムル」一事を遺忘 と。日用直接の学習も学文も等しく実践の為であり、その原理は同じである。心を用ゐれば則ち日用皆学、心を用ゐ 読」書以二学_之_志、則大-益也、以」読」書為」学、則玩-物喪-志之徒也、(「要錄」)

くとの個人の体験形成は常に何らかのそれに先立つ精神的公共体の全体的総体的体験によつて育ぐくまれ且つそれを 得るのも、過去の体験内容を有するからである。そこに自己の創意と工夫を要するにしても、もとがなければ不可能 省すれば何人にもあまりにも明瞭なることが、往々あまりにも忘れられてをることに対する厳粛な教戒である。 積極的にそれに働きかける相互交渉関係の間になるものである。我々は無意識に空気を呼吸して生きる如く、全体生 地盤として成立し開展する。社会のそれも他の社会又先の世代に負ふこと亦同様である。それを可能ならしめる条件 に理解される所であらう。たゞそれに「心ヲ不」付ユエ、是ヲ学ト不」知」だけである。この基本予件が存する為に個 活の文化を呼吸することによつて人らしい生活を営むことが出来てをるのは、日常生活を一寸でも反省するならば直 れながらにして知るものではない。学問も先人の文化形成の努力、文化財と伝統との感化啓蒙誘掖とそれを受容し又 のうち根本的予件となるものは言葉である。しかも言葉について考へてもわかる如く人は決して何事も学ばずして生 である。事実我々は自らの工夫発明よりは、先人の遺沢によつてをる。是れなくしては一歩もあゆみ出すことを得な い。我々は一切しかるが如く知識も亦直接には自己の民族ひいては過去の全人類の経験に負ふてをる。こゝに見る如 学問は教を学ぶことであり、見ならふことである。今日日用は常に新である、併し我々が変に応じて判断し行為し

る積極的努力と創意がなければならぬ。 年月の経験の試練を経て格典化した形態である。学ぶと迄には仰々しく意識しないうちに常識を学ぶことによつて大 如何なる関係にあるのであらうか。それは本論の進むに従つて自ら明になることであるが、健全なる常識が学術に於 抵はそつなく日常の用を足すことができるであらう。 もそれを囲繞する社会の文化水準と密爾に相ひ応じてをる。常識といふのは此の全体生活の体験内容を一般に普及し 人としても又全体としても文化の継承維持のみならず向上進歩が不断に円滑に加速度になされる。個人の体験の程度 ても基礎となりその素地とも言ふべきものであることは明かであらう。こゝに古を好むとか古を学ぶとか云ふことに り各民族によりその水準は多種多様の段階を有し、変動と向上とが存することは言ふ迄もない。学問と此の常識 てゐる知識の程度水準の見地から名づけたものである。 それは如何にして、何人によつてなされるのであらうか。 併し常識として一般に普及化される迄には、 風俗習慣礼儀作法等も全体の体験が生んだ生活様式として長 常識にも時代によ その知識を工夫す とは

ガ定、 次ニ如」此寸ハ、古ノ聖人ノ至極ハ、不」学不」問シテ 自ラ後代ノ手本トナルコ出来コトクアルナレハ、不」求語覚。 リモテユキ、其便リアラサルコハ皆不用ニナリ、便アルヘキコハノコレルヲ、 唐・日本モ数千歳ヲ経ヌレハ、其内聖賢オコリ、人民日用ノ法悉キワマリ、世ニ従テ政ハ文章多ク、或ハ質素ニナ 源ヲ了簡セバ、 一々人ニ不」学古ヲ不」聞た、 通用ナルヘキコトモ云ヘケレモ、 々思慮シ出サント心得ルハ、知慮アルニ似テ至愚也。故其本末ヲ考、 誰ガイタセルト云ヿヲシラズ。此筈ノコトク風俗トナレル日用多シ。是併聖人相定ル処ノ用法多シ。 其前後始終ヲ詳ニシテ、 打ツヾキ人民ノ間ニ用来リ、 コトニ心得アルコ也。 世ト推ウツルニ不り 開闢已来大 今日又其本 是ヲ一 是ハ誰

つき素行は次の如く述べてをる。

如也。

也、」と述べてをる。古訓を学ぶとは実際に於ては史的研究である。 古へを師とせずして、以て克く世を永らするは、説の聞く攸に匪ずと説いたと伝へてゐる。素行は此の言を、「学之一 を学ぶのであり、拠るべく鑑みるべきは歴史の事跡である。こゝには全人類の体験、全文化財が含まれてをる、故に、 命下によれば、傅説が高宗に告げて、王、人は多聞を求めて時れ惟れ事を建つ、古訓を学べば乃ち獲ることあり、 と欲しても無益であり、寡聞固陋で博通し得ない。従つて孔子も生れながらにして之を知る者に非ず、古を好み敏に して以て之を求むる者なりと云ひ、述べて作らず、信じて古を好む者とは、孔子の自ら許した所であつた。尚書の説 歴史生活を措いて現実の生活はない。学問に於ては我々は歴史に直接してをるのを知る。かくの如く学ぶとは過去 前」此未」有一言者,而説首以告一高宗,万世之下、学者之所,以為上学遂開、其功大矣哉、」「是学之所,以三一古昔

ノ上ニナラワシヲコナフヿ也。カサヌルノ字心アリ。学而時習ト云、伝而不」習ト云、 学の字義は以上の如くならふ意であるが、素行は「ならふ」に效と習の二義ありと言つて、 人ノ云コイタス事ヲナラフハ、学フト同意ニテ、效ノ字ヲ用。故学ハ效也ト字訓セリ。習ノ字ハ、学コヲ今日日用 ナレナラワシニナル心也。ユエ習ノ字ハ、行ニカヽル。(ニ) 習相遠ト云字ノ心、 皆物ニ

れるのが鉄則である。かく身にこゝろみなければ、知は実知でなく借り物である。時空を超える他の全体的経験を自 深化拡充正確純熟せしめ行くのである。学ぶとは他の体験を学ぶのであるが、体験は常に体験によつてのみ読み取ら は不審を生じ、疑つては再び問ひ学んで、その解決に工夫を凝らし、身につみて我がものとして、学べることを益々 と述べてをる。現実の学習の過程は学んだことを自ら折にふれ事につけて動作にとり用ゐ応用し、行ふうちに惑ひて

(「要録」)と言つて、力行省察を学に重んずる。夫子の時に習ふの時を、素行は「時者無」時而間断」之謂也」と解し、 の実践の切要に促されて始めて真剣に求められる。 学と問と習との交錯聯関が生きた 学問形成過程の実である。「学 己の一身に融化収得するのが学の本質である。認識と体験とが相呼応するのが正しい順序である。学問も亦実際はこ 「知而不」力」行、則不」可」謂」至、力」行而不」省一察、則知」鑿行」蕩、又不」可」謂」至、力一行省一察而」後知」之」至也」 「夫子習字上以;;時字、万代学者之規模、其思太深長也」又「学唯在;;積累之功」と「時」に力をこめてをることに注意 ルコモ行ニナラワシ考サレハ、皆口耳ノ学ト云テ、実ノ学問ニアラサル也。」と言はれるのである。しかれば素行は、

せねばならない。不断に間断なくつとめて止まぬといふ意志的力行は素行の根本思想の一つである。

的実践的な近思といふことがなければ、たゞ外的な借り物の集積であつて、身に実なるものではない。学はまなぶ即 思」といふことは必然その背後に実践を予想する。時処位に即しての行為といふ立場にある時、始めて近思といふこ けて思ふことで、所謂「近思」である。時に旧新あり、国に風土の相違あり、いづれも損益して考へねばならぬ。「近 思とは密接不可分離である。素行は「学不」思則其知不」詳、思者窮! 致其知! 之謂也」と言つてゐる。 ちまねするにその語源を由来すると言つたが、学は所謂真似することではない。併し「学」はそこに最も「まねする」 とが切実具体性を帯びて来るからである。又自主的に思ひめぐらさざるを得ぬのである。従つて学ぶこともこの自主 に至る弊害と危険をきざしてゐる。両者の差紙一重の間にあることは我々の身辺を不断に省みねばならぬであらう。 「学んで思はざれば即ち罔し、思ひて学ばざれば即ち殆し」も亦同意である、この思ふといふことはわが身にひきつ 「博学審問慎思明弁篤行」が正しい学問の全相である。相互に脉絡貫通して完きものである。論語の「博文約礼」や 素行は博学博通を重んずるが、併し学ぶといつても所謂物知りだけでは実知とならぬことは言ふまでもない。学と 中庸に所謂る

素行は学弊の尤なるものをこゝに痛感した。素行は此の間のことを、今日日用の行事悉く聖賢のいたし置く処を学び

行ふにありやといふ問に対し、次の如く親切に答へてゐる。

る弾力ある思想を尊んだ。 実学者素行は常にこの「必トスルイカタナシ、亦必トスルイカタアリ」の間に実地に於て詳に通達し周く洞察判断す 覚エタルモノハ、皆聖賢ノ地位ニ至ルヘケレモ、 者ノ尽」性尽」心トコロナリトシルヘシ。ソノユエハ、学ビタルママニ何事モ行イユクモノナラハ、古人ノ行迹ヲ能 悉聖賢ノ行事ヲナサハ、是則聖賢也。 トライタサンニハ、相違アルマシキコナレモ、聖人ノ行ニ必トスルイカタナシ、亦必トスルイカタアリ。是コソ学 エナクテ是ヲ致サンヿハ、マコトノ道ニアラズ。(中略) 古ノ聖人ノ行ヲキイテ、今日ソレヲシタイ、ソレニ従テコ ト行トハ、時代ニヨリ土地ニシタカイ、ソノ人ニ因テ同シ如クニテ、事々相違スルヿ多シ。シカルヲ聖人ノ行ナレ 是学不、思則罔ト云心也。然レハ聖人ノ行ト聖人ノ言トヲ比校ソ、而後ニ己カ知ヲキワメテ、ソレニヨツテ行 コレヲヨカラント一片ニ存ノ、其思慮ウスキ寸ハ、国君ハ失」国コヲ不知。匹夫ハ身ヲ保ヿヲ不」可」得。(巻三) ハ、違フヿスクナカルヘシ。(中略)只其マチハカリヲシテ、ソノ聖賢ノ実ヲ不」学ハ更ニ用ニタタズ。(中略)事 素行は亦此の文につゞいて、人の自主的に思慮するや否やの内面の動因が実に当人の志の 但聖賢ノ行事ハ、皆事物ニ随テソレー~ノ品節アリシ事ナレハ、ソノワキマ 内ニカエリミテ是ヲ思慮イタシテ不」行ハ、 却テワケモナキコ多

有無如何に一にかゝつてゐる点を指摘して、 次の如く述べてゐる。

カタアランコは、 内ニソノ志ナクメソノ事ヲ似ルコト也。 似為ト云ト大ニカワレリ。 当時ノニセモノナト云是也。(中略)凡人善悪モニ自立テ其事ヲナスモ 学フト云ハ実ニ是ヲ師トノ、コレニナラフヿ也。 マチヲイタスト云

其悪モ変スレハ必善也。是志気ノ一定セルカユエ也。

ノハ、ソノ善ソノシルシアリ。

を為し得るのは記憶し判断し明弁し得る能力弾機を 人は天禀として 固有するからである。 素行は 次の如く言つてを 人の働きは全て人の精神力によること言ふ迄もない。しかしてかゝる働きは知るといふことから始まる。 かくの如く事物を感通知識し、学べばよく事物の道理に通達し、古今宇宙を一身に弥綸して自ら一天地を創立する

る。

次ニ何事モ学ヒユクトイへハ、悉外ヨリ習コトニデ、我中ニ有ヿニアラザルニニタリ。人ハ天地ノ中ヲ受、学質だ我 秀気ヲモチ出テゲレハ、能人ニ従テ、能学ハ、善人トナリ、賢人君子トモナリヌヘシ。至テハ聖人ノ地位ニモ升ツ(メ゚) トク、不、得、至ハ皆外ニアルニ同シ。マサシク其学フ所ヨリ入テ、己カ知ノ明暗ニヨルヿ也。 へシ。此下知我ニアリ、是ヲ知恵ト名付也。学モ智ヨリ出テ知ヲミカクノ心得也。故至リ得レハ皆自己ニアルガコ(地) 五行ノ

る。 極を尽し致して、此を実知たらしめることである。学は天然天賦の可能性潜勢力を実にし具現する根源力である。 可能性と潜勢力は天与のものである。学は自己分上の努力である。学の力とは此を主体の側から言へば精神の明であ と明を与へるのは学である。人は生れながらにして知つてゐるのではない。学べば万物に通じ得る。学び知る働きの である。認識するといふ固有の働きと能力は認識さるべき対象の実質内容迄も固有してをるのではない。それに内容 併しながら智恵は素地であるから、それを明ならしめる為には、それを育ひ伸し鍛えて行かねばならぬことは当然 故に「学モ智ヨリ出テ知ヲミカクノ心得」である。学は他ならず、天賦の知恵をして、その天に享けたる性の至

れ学である。しかれば事実日用の間学問はいかにして学べばよいか。その心得如何、いかなればか学の至極を究め得 学の真義が以上述べた如きものとするならば、人たる者全て学ばざれば人たるを得ぬわけである。 日用時々歩々是

¥.

問

るか。素行曰く、

聞ヲ事トセンハ、一向ノ義ナレハ不」及」論、世間日用ノコモ、志立テ考問寸ハ、大概シレサルコナシ。此上ニ、聖 次ニ如」此云寸ハ、一生学問ニ泥ミ、イヅレヲ得心スルト云コナク、又一時ニ了覚シテ、 其ノ道ヲ悟ルト云コモナ學ドルサ 明ニシテ、事物ニ不」惑ユへ也。而シテ学フト云ヿハ、日夜不」尽ノ道ニシテ、学フ処ヨリ次第ニ知明ナルヘシ。夫 人 子ハ生知ノ大聖ニシテ、学不」厭斥、敏好古氏、好」学モノ玉エリ。 ク、イツモ学問々々トハカリ云ニナリ、博文多識ヲ事トスルコトクキコユ。コヽニ心得アリ。古ノ事ヲ覚エ、文才多 ノ大道ヲ得心シテ、其知キワマル寸ハ、ツイニ通ゼズト云コナキニ至ルヘシ。是悟道見性ノイ、ニ非ス、 唯知ノ

ځ

背モノアラサルユエ、一生無..子細.送ルヿ不審ニアラズ」である。技術は之を学び精確な知識を得なければ一歩も進 学氏一生無事ニオクル人ノミ多シ。 ものも多い。 であるからには何人と雖も此を無意識にもなし、又それに従つてゐるのは自然の勢であらう。それならば世俗のまゝ ワタルモノ也。 対象として補足関係をなし、真の学知は世知に対し、指導的標準的なるものであつて、師の役を果すべきである。故 にまかせ、世知を以て足れりとしてよいであらうか。或る意味では、学知と世知とは対立的に見做される。併し事実 に学者は先覚者として世俗の指導者である。 上はその対立といふのも厳正に言へば、両者が必ずしも悉く矛盾し対峙するといふわけではない。両者は同じことを 以 上の如く、 否 素行は世知を重んじ、 惣テ天下ノ掟、古来ヨリアルコナレハ、是ヲ背寸ハ人不」免。 人々身命ヲ大事ニ思ユエ、 大法 学知かへつて世知にかなはず、 是世々ノ掟作法ニ従世ト推ウツルユエ、ナマシイノ学者ヨリ却テスナヲニテ世ヲ(ヒ) 常識を尊び、世俗慣習を学ぶことを学問の第一歩とする。 別に学問をせずとも生知のまゝに一生を送り、 世間に於ては、学は往々迂遠無用の代名詞とすらなる。是れ、「不」 格別の痛痒なく過し得る か」る学習ならば人

y ° 造され、 は素質と習染の漸によつて形成された知である。 滅亡に近きを覚えず知らざることは我々のにがい経験である。生知といつても純粋に先天的といふ意ではない。 正の実を得ず、楽と思ふこと皆苦、安しと思ふこと皆危く、 諸 問ひて以て之を弁ずる所以である。故に素行は、「大概ノアラマシハ人ニ問、 ニアラズ。 ノ大義、朋友ノ間ノ出入、夫婦ノ大綱、又ハ天下ノ大事、国家ノ制法ニイタリテ、自己ノ細工工夫ニカナワザルコア 今を察して詳に思慮すべく、 機の複雑、 K 身体あり、 々の事物に古法古例あり、 此時我信実ノ心得発見シテカクレザルコナリ。 スベテ此品々ヲ考自ラハカルトキ、 不」学シテハ推量ニ及ベキコ 本然の如く身についたものである。素行は此を気質と名付ける。生知は気質より出た知である。人の性の現 故人ノ人タル道ヲナラワズシテ不」叶トハ云ヘル也。」と言ふのである。生知のまゝで料簡しては、善悪邪 治国平天下となればもはや世知俗智を以つてしては事をなし得ない。いはんや生知の推量に於てを**や**。内 日常の現実生活をして至善に止らしめんとすれば世知のまゝでは事足りない。 外に五倫あり、 飲食衣服居宅の用具あり、その品々、朝暮起居動静周旋、斉家治国用文行武の業あり、 自己の恣意私見を以て処置すべきではない。 天下の法令、国家の仕置、古今の通例、当時の新法、その教戒省察の道、悉く鑑みるべく、 生れ落ちるより成長するに従つて学習見聞の仕様によつて自然と形 長かれと思ふこと却て短く、久しかれと思ふことは忽ち 完美を期すれば、 其ニマカセテ事タリヌベシ。 身辺の些事はまだしも、 君子学びて以て之を聚め 君臣父子 それ 万

妄発となつて却つて生を損ふ、学んで以て客観的な準則に率つて身を修めよとの誠である。 まざれば其の蔽や蕩なり、信を好みて学を好まざれば其の蔽や乱なり、剛を好みで学を好まざれば其の蔽や狂なりと を成さず、人は学ばざれば道を知らずと云ひ、夫子は仁を好みて学を好まざれば其の蔽や愚なり、知を好みて学を好 敏なるも、 実態は気質である。 性的存在者たる人間には意志の自由があり、 人の人たる所以を示してゐる。理性のない動物には主観も客観もない。必然的因果の唯一の機制あるのみである。 なる準則を立てそれに遵ふことである。学は主観と客観との一致を求めることである。人間が主観的たることは一面 云ふ、夫子の所謂六言六蔽は、 何程か客観に与かり客観性を得てゐるからである。主観が客観的であるだけそれだけその実在は真となり具体性を得 としては見られぬ。現実の精神界は主観と客観の複雑なる交錯的復合体である。 示す。併し主観の天地は客観の天地と相一致してをるのではない。 亦学ばざれば道を知らず、道を知らざるときは生質の美敏が却つて弊をなす、学記には玉は琢かざれば器 気質は習染による。従つて気質は十人十色で主観的である。過不及を免れぬ。 生知のまゝ、主観のまゝ、気分的情趣のまゝに直情径行しては、 取捨選択がある、 それは人間は各人自己の一天地を造立してをることを 勿論現実界に於ては絶対純粋の主観も客観も事実 ものが存在するといふことはそれが かく考へれば学は客観的 その結果は放蕩流逸 生質の美、 知識の 理

然環境と時代社会の精神環境との制約を免れ得ざるものである。我々の為す一切の業は気質に発し気禀に応じたもの れば夫ゞ天地霄壌の懸隔差異を来すのである。それは個人、民族国家、社会、時代いづれも同じである。気質は亦自 性 相ひ近きも、 それ以外にあり得ない。風俗習慣時代思潮に我々は無意識のうちに最も根強く感化影響されてをる。 感通知識の厚薄広狭深浅の習の相ひ遠きによつて形成される気質は千差万別で、価値と内容より見 戎狄の

る。

範となる教も道も人間の所産であり、 が存する。 社会の表面の制約を超えて真実至公なるものを求めねばならぬのである。 真実に道を求め至善を志すものは自らを制約しつゝある偏倚を打破超越せねばならない。 を覆ふ思潮が必ずしも正しいとは言ひ難い。 識に従つて行為するなら生活上事欠かぬであらう。 風に習染すればそれを以て本然の性となすに至る。それ故にこそ教に因て道を修めなければならない。 する。この人生観の根本制約は信念又は信仰とも言ひうるであらう。正確な知識を求める学問はその主観的映象を修 ずデフオルムされたものである。

人は自らの作つた映象、

根柢的思想によつて束縛制約され、

一切の行動はそれに発 じて明暗の度合こそあれ何人も自己自身の人生観、世界観とも言ふべきものを形造し所有する。それは人生世界のあ ナラワサレハ、善悪ノ実キワマラズ、似タルヲトラエテ是ト思、 非ト思テ、 其至善ニ不」止」 自らの気禀に応じて是 大公ならしめ、節に中らしめるにある。「人不」学則不」知」道生―質之美知―識之。敏不」知」道其_蔽多」(「要録」)が故に るべき本来のありのまゝの姿を如実にうつした正しい映像とは必ずしもなし得ない。人間の認識の所産である限り必 と思ひ非と思ふが如く行動する。人の行為はその知力の程度に比例しその埒内に限定される。 素行は「変;,化気質1、而後可」謂;j実学;」と主張するのである。学問の功は生質に従へば必ず過不及ある気質をして至 相対的段階的なるを免れぬであらう。 正改訂するのである。それを客観性あらしめるのである、絶対純粋の論理性を以て律すれば学術的客観性と雖も勿論 人間の認識と創造は常に不完全であり、人のなすこと全ては理想に対しては相対的であらう。 学問の積累の功を重ねることによつて 向上進歩の歩みを続ける。 人は「不」学 人は自己造立の主観的制約を絶えず打破して行かねばならぬのである。 常識に従ひ流俗にならふ間は未だ主観的で真実に正しいものではない。 併し俗知は必ずしも正確で至公なものとは保し難く、 そこに日進月歩といふ人類の進歩と向上と 自己のみならず、 自己の知識と経験に応 大概は世の常 時代の表面 従つて

して客観となることである。かゝることは先づ準則を立てそれに則りそれを見ならふことに始つて可能となる。客観 てることである。「知」之」至、遂変」気一質、」(「要録」)、己の欲する所に従つて矩を踰えずとは、主観が主観のまゝに とは即ち亦真理であり正善であり当為であり規範である。 自省請」益、責一己内外一」るのである。学問の最も禁ずる所は自己の心を師とし意見臆測を標準に立

真理とのみ言つては、未だ不充分である、価値の世界であり、規範を求める実践の学では至大至公といふ素行の言は る。人倫の道も天地の道に基いて建つ。 ある。しからばその至大至公底の窮極依拠は何であるか。それは天地そのものである。道は天地を以てそ の 源 と す る。事物の已むを得ざる準則はその事物を究明して始めて得られる。又真理の発見闡明は逆言すれば誤謬の指摘、迷 信の打破となる。学術は自己自身の又人類全体の誤謬と迷蒙とを破摧闡明するのである。積極的には至善に進めるに 正確な客観性と高き理想性とを追求する所にある。そしてその客観性は事々物々についてその品々に対して云為され 更に綜合的で、その深意を玩索せねばならない。他の文化現象に対して標識となる学問の学問たる所以はあく迄厳密 知識又は真理の体系と称される。併し自然科学に於ては普遍妥当の真理と言ふだけでよいが、精神科学哲学に於ては であり、至善の極を尽せる謂である。学術とは普遍妥当の真理探求の知的作業にして、科学とは精密にして正確なる 大至公底」である。 かくの如く観来れば、学の標識、学の学たる所以が明になるであらう。学問の標識は素行の言葉を以てすれば「至 至大至公とは古今に亙り上下に通じて変らず悖らず謬らず、共に由率すべき已むを得ざるの準則

学之標的以,意見,不」可,準拠、以,道統聖人,為,標的, … 以,己性,不」為,標的、以,聖人之道,在」為,学的: 詳

可\究:|其標的|也|

観俯察、皆這箇天地之用也、故我所,1標的,在,1天地、求」之不、遠、去,1意見,棄;1文字之泥著、直以,1天地,在」為;学之 古昔聖人未,曹無,標的、其標的存,天地、万物無」不」覆,載天地、万物無」不」在,天命、一片時亦不」遁,天地之間、仰

票的 也

学習之工夫、悉以,,,聖人之教,,比校来之謂」である。 修為の法は、「古聖人ノ立置処、ソノ見行ヲ知、当時世上ニカシ 学ぶべきは聖人の教である。そこで素行は真の学問を聖学と称する。しかれば学法は、「学者以二聖人」為三標準、日用 を師とし、意見に落在し、私意私見を立てることである。此れ学薇の最たるものである。従つて「学之標準在二聖人」、 忌み排すべきは、公是公非を知らず、「自ノ是非ヲ是非トシテ、 天地人物ノ公是公非ヲシラ」ざることで、 自己の心 窮まるのである。 てこそ、始めて天地万物の間日用に処して惑ふことなく修し、至善を尽すを得るのである。学問の用法はたゞ格物に 性は得られる。それが格物である。意見と文字は真理ではなく、天地是れ師、 コキ人ノ行ヲ考、ソノ上ニ我心ヲ引合テ思慮イタサハ、不」中ト云に遠カラザラジト可」知也。」(巻一)と。 天地万物の事実現象そのものに真理と法則は内在する。事実についてのありのまゝの観察と思慮によつてのみ客観 至大至公の典型は天地であり、聖人である。聖人は天に象り地に則つて教を建つ。従つて学の最も 事物是れ師である。格物し事物に通じ

用与」学、其説異也、日用者百姓日々用来底也、学者效言学之言而正言其道言也」と答へてをる。 陷り人捷径を専らにし易く、事物定則の件々は悉く正しいとは限らぬ。「今学者深潛諦玩、而詳索:不」得」止之則(或沿 らざるものを自覚することである。それは道の立つ奥と意義を自覚するが故に、更にその件々を深め又其の道を正す ことも、 学は是れ日用の間にあるのに、夫子は単に日用と言はず、別に学の名を立てるのは何故かの問に対し、素行は「日 又変に応じ内容を越えて新に立てることも得る。百姓日用の道は長い歴史の試練を経て来たが、風俗利害に 学は 百姓日に用ゐて知

晩年、天和二年(六十一歳)に書いた随録に次の如く記してをる。 或革、漸次融釈、可、知12聖人之教11、此れ世知に対する学知の本意である。学は古訓を学び、博通を重んずるのは単 西に求めるのも亦同じである。前に度々引用した論語の「行有!|余力|則以学」文」といふ 孔子の言葉につき、 素行は に知識の素材を求め、それを踏み合とする意のみではなく、至大至公の準則を求めるからである。知識を広く古今東

本、学」文為;此世事、而学問未、優、則己心制;世事、能学」文、則以」文制;世事、不」学」文、則出入之用、未」可」 道義之講習也、利害之心長、則道義消、道義長、則利害消、学文者為二世事日用之本、世事者皆為三驕泰淫楽礼容之 案、此八字尤有:1深意,人心移」物而変、日用事物之応接、皆未:"嘗不:1学問,而学」文又不」同、故日応接則世事日長、 日学」文則学文日長、物不二一立、世事長則学文消、学問長則世事消、其間世事者、皆利害視聴之用、学文者、古今 行有11余力,則以学、文、往年唯読11此章,日用力行之暇、以、学、文也、措11力行1非、学、文、其見解甚疎也、

又同じ時に同様の事を次の如く自記してゐる。

得」其道、故此八字為,眼目,也、則字尤有、味、不,緩々,之義也、(「章数附」奏貞)

案行有余力則以学 文 此八字甚有、力凢人与、世相交際出_人之用皆無、非、学然以、之為、学而不、学、文則日世事之功相 長徳義之善日相消故出入之間少有、余力以学、文在1温、故而知い新也此八字甚有深味可1熱読玩味 也

日消故難;少暇,以、学、文為、要也六言六蔽専以、好学為、要又曰敏而好学又曰不、如,丘之好,学也論語陽質篇 人心者能移」物而道-心是_微也故平生之交際与,学、文講,義本不、二事而専涉、交際而不、以,文学,則養、徳究、理之道

亦不」因」学則其所」為尤偏固而不」可」得」其実也前章与行有」余力則以学文大_差(同上、本引用文へ自筆原本ノマ、) 子夏吾必謂;之学;矣章 案此章子夏之言甚非也不」学則事」父母事」君与朋友交如何得;;其実;乎竭」力致」身言而信

√徳之序、皆学之有√法也、法唯下学与√立□標的□耳、」と言つてゐる。それならば先づ志は何を以て標的とすべきであ 方向が正しい標的を不断に外れぬことである。即ち学の成るや否やは一にかゝつて志の立て様如何にあると言はねば ならぬ。次に正しく目的を達成するにはその学び方をあやまたないことである。いかほど努力しようと、そのとる道 らゆる事業がその功を成すにはしかるが如く、それには一は行為主体の心的態度、即ち意志の強堅な一貫操持とその をあやまるならば、徒労であらう。此は志と学法との問題である。素行はこのことを「大学、以『綱領条目、言言其入 らうか。それは以上の素行の論より自から明かであらうが、素行は更に詳しく、次の如く述べてゐる。 物致知ニアル也。聖人ヲ立テ標準トセサレハ、学ニマトフ処アルヲ不」知、 治国平天下ノ用ヲ志気トセザレハ、 至 正しい学問の意義が以上の如くであるならば、その学問を身に実にするにはいかにすべきか。学問にかぎらず、あ ソノ志処ハ聖人ノ道ヲ標準トスルニアリ。其志気ハ治国平天下ノ用ニアリ。其行処ハ身ヲ脩ルニ始リ、其学処ハ格

大至公ノ実ヲ不」尽、其行処脩身ヨリ不」始ハ、近ヲ忘レテ遠ヲハカルノ失アリ。学ブ処格致ヲ以テセザレハ、其手 ヲ下ス処不」正也。(巻一)

ても、其の位にあらざれば其の政を謀らざるが道ではないかといふ疑問が生ずるであらう。それに対し素行は反駁す る。学は何の為めであるか。天下に立つて政を正し、人の朝廷に立つて博く施して衆を斉ふが為ではないか。夫子戦 学者の志気は治国平天下の功業にありとするならば、学者必ずしも政治家ではなく、たとへ廟堂に立つ意あるとし

得」位ハ思悉ク出」其一位、 誡の意は「思不」出□其位□ト云ハ、我分限相応ノコヲ思案シテ、 当時相応セザルコニ思ヲツイヤサヽル也。 平天下を標的とし極功とするといふことゝは問題が別である。「人必時アリ。故ニ世ニ不」用不」遇」時寸ハ、ヒソマツ 至るからである。「サレハ治国平天下ノ用タラズシテ、自己一身ノ工夫タランコハ、其量セハクシテ我見ニ陷モノ」(同 民考」三王建」天-地質」鬼神ノ道ニアラズ。言必信、行必果、径々然小人ノ学ニノ、士ノ志気ニアラサル也。」(同上)であ 衆コト治国天下の極ニイタラズシテハ不」可」得。是学者ノ極功也。大学ノ道ハ、明徳ヲ天下ニ明ニノ平三天下」也ト云 国に生れ六十八歳まで国々を往来し、一たび道を立てゝ、百姓の塗炭に陷るのを救ふとの深厚の志やまず、孔門の弟 ガエル也」(同上) と述べる。人生を対象とする学問は学問の行為主体者そのものが常に広範な視野と活溌鋭敏な実践 ヲ云ニアラザル也。俗学ハ思ヿハ分ヲコエテ、学フヿハ固陋ニシテセハー(しシ。故タマー(一位ヲ得テモ不」得」行、不」 「アルギ ヒ楽ムト云ニハアラズ、今示ス処治国平天下ノ事ヲ以テ、学者ノ志気規模トモセヨト、云ヘル事」である。前者の教 テカクルル、是時也。易に潛竜勿」用ト云ハ是也。以」此或ハノガレ或ハ不」見」是シテ、更ニ悶ルコトナシ。コレヲ悦 する。何故なら至大至公底の具現し得る場も又その正実たることの実証される場も此の治国平天下に於てじあるから る。又素行が学の標識として最も重んずる至大至公底といふのもたゞこの治国平天下の志気あつてこそ達成されると 子皆其の志を云ふときは朝廷政事の用で、夫子はこれを称美す、此れ決して名利に汲々たるためではない。「博施済」 上)である。従つて世に遇はずして悶ほることなしとか、君子は思ふこと其の位を出でずとかいふことと、学者は治国 である。此の志のないときはたゞ一身を事として世事を思はず、性心道徳の論を事として実は自己の心を師とするに ニキワマリ、中庸ノ極功ハ、天地位万物育スルニ至レリ。何ソコレヲ分ヲ踰タリトセンヤ。シカラサレハ本」身徴」庶 高慢我慢,ヲサキダテシキリニ 堯舜湯武ノ 思ヲナス。 是古ノ聖賢ノ教示スル処ニ 大ニ相タ 学問ノコ

性理の学と対決したのは、朱子学の末派亜流が性心の空虚なる形而上学にうつゝをぬかした心的要因をこの志気洪量 の沈淪にあると見なしたからである。素行は真の学者は豪傑英雄の士、即ち大丈夫たるべしと強調し、 ある。従つて素行はこの実践意志を失つた傍観的態度が学問を堕落せしめる最も有力なる要因と考へる。素行が宋明 意志を内に堅持しなければ、生きたる実人生を司配し得ない。生命はたゞ生命によつてのみ看得体験され得るのみで 学者の志気と

学問と国運との相ひ昇降し互に呼応する因果関係を次の如く主張してゐる。

H 豪傑ノ機ヲトリヒシキ、唯静坐黙識ヲ事トシ、ツミナクテ配所ノ月ヲミルヿヲ思フ。サレハ学者ニ豪傑英雄ノ士不 風俗頽廃スルヲ以也。(巻五 等ヲクダリ、 然レモ猶唐ニ文学盛ニシテ、魏徴・房玄齢・杜如晦カ類甚世務ニ大業ヲツクス。宋巳後理学・心学ノ説出人品又一 魯仲連・孔明カ類、 性心ヲ弄スル 古ハ士生ル寸必桑弧蓬矢以テ天地四方ヲ射ヿ、 ニクルシメラルルヲ救ヿヲ不、得、学者皆手ヲツカチテ讎ニツカエ、ツイニ元ニ滅サル。併学ノ根サシ不、正、 ユエト可」 謂也。今ノ学者ハ皆聖人ノ徒ニアラズ、ロニ経ヲ唱トイヘ氏心ニ隠逸ヲ以本トスルコ、皆宋・明 風俗日ニ衰テ、国家ノ輔佐ニアタルヘキ輩、中華ニモスクナシ。是学ヲ以テ志ヲ養、才ヲ厚クスルコ不ゝ能カ 唯洒落脱然ヲ事トス。 是ヨリ豪傑ノ士不」出、 日々月々風俗オトロエ、人々安」小-成。故ニ宋朝ノ金 ノ誤ヨリ起レリ。 世二不」之。 故二戦国・秦・漢・三国人ニ豪傑ノ大丈夫多シテ、叔向・子産・晏子・伯玉・范蠡・ 晉ニ老壮ノ学ヲ習テ後、人品一等ヲクダリ、 コレ志ハ在、四方ヿヲ不、可、忘戒也。 陶潛・謝氏力輩モニ隠逸ヲ事トス。 近世人ノ気象自然ニ沉淪シ、 下三

して流れ、 此の言葉はよく素行の志のある所、その真面目と本領、その人格を余蘊なく躍動せしめてゐる。素行の学問を一貫 かの学問思想想をなさしめた筋金は実に此の志気であつた。戦国武士の豪宕なる気象と真剣苛烈なる体験

丈夫の学であつた。そこに素行が新しい武士の思想的指導者となり得た所以がある。(此の点については 別に 詳論し の源泉を汲みとることもできなければ、 の遺風が近世儒学を摂取し令活体験化せしめた所に素行の学問の成立した根基があつた。此の志を逸しては素行の学 骨髄に徹することもできない。素行は実に豪傑の士であつた。その学問は大

素行は解する。かくて聖学の道は格物致知にありとして素行は大学の「格物致知」の道を詳論してゐる。 近ヨリ遠ニ至、下学シテ上達ス。是学ノ階級也。」(巻二)「学ト云ハ、ヒキク近クタシカニ跡アル処ヨリ、是ヲツトム ルヲ以テ本トス」(巻四)といふのが、素行の学問の方法であり標語であつた。「ヒキク近クタシカニ跡アル処ヨリ」と いふ実証的学問の精神こそ近代の科学精神の骨髄である。此の下学上達は「大学」に言ふ「格物致知」に外ならぬと 方向に足を踏み出し得ない。素行は学問の王道は実に孔子の云ふ下学上達に外ならぬとする。「ヒキキヨリ高ニ至リ、 偽の実証性、その客観性の依拠も亦人生日用以外にない。実践の現実界は一歩一歩の時間の過程内にある。同時に二 次にその学法は何であらうか。学問もその実践も上述の如く人生日用そのものである以上、その研究対象又その真

失はいづくにあるかといふ答に対し次の如く答へてゐる。文学読書をしても実学のない輩と世上に慣れて事物を学習 を引いて今を謗つたり、世事を尋ね実務に当らしめると、一向に通ぜず、無学の者に却つて劣るが、かうした学者の 論し、学蔽こそ実に身をあやまり国を傾ける所以と述べてゐる。例へば、当今の学者が其の身の言行正しからず、古 てなされる時、それだけにそれは却つて人生を損ふもとになることを省みねばならぬ。素行は著書の随所に学蔽を詳 このやうに学問は実に人間界を創造形成する基肥であるが、その道をあやまる時、

又学問が志のない輩の手によつ

き、 事ニ及トイへモ、実学アラザルユエ、是ヲ取テ指引スルコアタワ」ざるのも、その根本の欠陷は「忠孝道徳仁義ト云 ととについても同様で、「本朝ノワザヲ不」知ユエ、平生ノコアシモトノ小事、サラニ不案内ニノ不」能」勤。況大義大 俗ニ不」可言相応言」と。かゝる文字の学者の失は「是泥」文―書」が故で、外国を師としても実は此を知らず、我が国の 品万物ノ次第不」同、必異国ノ風俗ニナサンコヲ云、大唐ヲ以テ日本ヲ評シ、 水土の相違を無視する。「文字ノ学者ハ、以」異-国為」師、大唐ト日本ト同ク一天下ナリトイへ氏、国ノ大小有、 ようとする。「但不」変ヿ変スルコト、損益ノ道アルコ也。是実如キラマラザレバ不」可」知。」ものである。次に彼等は(ワ) 役にも立たない。 ふ、大概百年に世間大変し、五十年・三十年に中変する。これを考慮せずに数千載の以前のことを取つて、今日に合せ テ日用ノ害トナル。」からである。 大本に通ぜず当座の間に合うだけであるが、一応当用にはくらくない。「文字ノ学者日用ヲ知ベカラズ、」故に当座の して知恵ある者とは世務に於ては比較にならない。両者各々失があつて、後者でよいといふわけではない。実務家は カキ付テアル文義字義ニマカセテ、思慮スルヿ不」能ガユエ」とする。 此の自らの体験によつて 実地に於て主体 それは「文字ノ学者ハ今ヲ不」知ユエ、不」通」時−義、又古ヲモ不」詳。凡実学ニアラザレバ、文書却 からした文字の学者は第一に時代の相違を考へない。 本朝ニ居テ異国ヲ願フユエ、日本ノ風 古今隔れば風俗人情大に違

文学者人ヲ教立ルモ、子孫ヲ教戒スルモ、唯物読学間斗ニ、知者モマナヘハ愚者ニナリ、勇者モ是ニナラエハ怯者 知 自身ノ知ウスクナリテ、思慮ノイトマナク、 トナルへシ。況ヤ民ノ長、侍ノ司トナリテ、其下ヲ下知センヿハ沙汰ニ不」及ヿ也。次ニ文書ヲヒロク覚ユルホト、 ハカリニナリ、 大道ノ実ツイニ不」可」得。大概文字ノ学者、此失アルヲ以テ日用大ニクラシ。世間ヲ能知テ、ソ 何事モ皆文書ニアリト心得ルユエ、実知必虚ソ、外ヨリ入処ノ学文ノ

的に思慮するを得ない、

即ち正しい意味に於て思想のない学者を更に次の如く痛論してゐる。

ノワザヲ詳ニスル人へ、時宜ノ学者ナレバ、文字ノ学者何ゾコレニ及ンヤ。(巻一)

素行はその伝統と本領を最も闡明発揮した大成者であつたのである。 以上は素行の学の概念の大略である。勿論此は素行の私見でも独創でもない、東洋の実践の学、儒学の伝統である。

すの綱領は「大学」に明にし尽され、以て見るべしと繰り返し主張してをる。従つて次に大学の経文に即して学の綱 様である。併し根を忘れて、枝葉を玩弄すれば、玩物喪志を免れぬ、学の弊はこゝに兆するのである。素行は学を為 領を考察しよう。 以上に学問の大黒柱と土台に関する素行の見の大体を述べた。根は地中に隠れて、枝葉は眼に映り易い。学も亦同

註本項は特に、「山鹿語類」巻第三十四聖学二参照

一、大

行した。朱子は四書の中でも、特に此の大学を珍重し、古人学を為むる次第を見るべきは独り此の篇に存すと言ひ、 記せるものと考へた。 をついだ朱子は、自己の見識を以て錯乱を正し章句を改定して、 定本を作り、 彼独特の哲学を以て 解した 註を附し 尊信し、弟の伊川も更に校訂を加へて定本を作り、初学徳に入るの門となして甚だ推重した。二程の大学表章の遺志 「大学章句」を著述した。大学をは朱子はその経は孔子の言にして曽子之を述べ、その伝は曽子の意にして門人之を 大学はもと「礼記」中の一篇であつたが、宋に至り程明道が此を礼記からぬいてその錯簡を正し孔氏の遺書として 四書を儒学の根本経典として表章することは、これより始まり、爾来朱子の章句が世に大に流

極と肯かれる。恐らく支邦二千五百年の儒学史を通じてこれ程聰明な述作は他にあるまい。実に大学は古代儒教の精 修養の順序手法を教へてゐるのは、宝貴すべき文獻といふべく、 学を起し五経博士を置いた儒学復興時代に教学の統一を計つた儒者の手によつて成立されたと推定されてゐる。 亦朱子とはその解を全く異にするが、大学を最も尊信した点は同様である。大学の格物に対する解の相違が二派の対 做す所以は、 が分岐する。 儒学の精神、 また儒教以外に出るものではないが、 思想の内容より見るならば、大学は儒学正統の学の綱条を余蘊なく言ひ尽して、精神的内容としては孔子の遺書と目 立をなしてをる。 が大学の心読に平生の精力を尽したかがわかるであらう。 しても大過ない。 文献学的根拠に基いたものではなく、その思想的内容から立論したのである。朱子と対立する王陽明も 学の目標、 しかも学風の相違はその基く人生観の根本的差異を示すのである。宋儒が大学を目して孔子の遺書と見 併し、 武内義雄博士は大学について、「いふまでもなく、漢代は儒教一尊の時代であるから、 学法即ち学の大綱領を闡明した経典である。従つて大学を如何に解するかによつて学の体統 現代の文献学の考証によれば、大学は孔子の遺書でも、曽子の述作でもなく、 孔夫子以来門弟子後学の間に発達し来つた儒教の萃を抜き要を提げて組 大学は古の大学で人を教育する法を記したものと言はれて 北宋の大儒程子が初入徳の門と礼讃したのも尤も至 漢代武帝が大 大学の精神も 仏織的に

華であり結論であるとともに、近世儒教の出発点である。朱子の大学章句と陽明の大学問とは近世儒教の代表的著作 力と価値を有してをる。かゝる意味で古典中の古典である。しかして我が国の近世儒学復興期に、大学の解釈に新生 であるが、前者は大学を新しく解釈することによつて窮理尽性の新儒学を樹立したものであり、後者は朱子の新解釈 命を充実せしめて、 の此の言葉はよく大学の歴史的性格を言ひ現してゐる。大学は時代に応じ常に自らを新にして再生し得る永遠の生命 れることがあるとすれば、恐らくまたこゝから出発するであらう。」(岩波文庫「学記大学」序)と言つてをられる。博士 に拮抗して致良知の新工夫を提唱したもので、ともに大学から出発してゐる。さらして将来儒教が更に新しく改造さ の朱王の亜流末派とは全く違つた学風が確立されたのである。 その精神を復興せしめた最初の一人は山鹿素行その人である。素行の大学の新解釈によつて従来

朱子の新本をとらず、テキストは古本を使用してをる。伝の章分は多くは章句に従ひ、字義については 学を表章したことを、「程子自;礼記中、表;出大学中庸、始大明;於世、其功;於聖学、不、大哉」「大学一書、程子初表; 思想的解義に於ては朱子と全く対蹠的な立場をとつたのである。 尤従;;朱子章句;」つてをるが、併しその義理については、「至」註;;聖学之大義。悉与;;程子;牴牾。」(「句読」)と、その 此一章、至三伝之十章、錯簡闕文衍字太多、而有三古本新本之差不三分明、能通三経一章、而後可」知三伝之釈意:也」と言 と称讃してゐる。 章之、然猶未"大明,於世」也、朱子章句或間一出、 天下家伝而人誦」之、 つて、伝の章次は其の序を失ふあるが如く見えても按拠する所なく、補緝改正の根拠とすべき所ないといふ理由から 素行の大学に対する尊信と四書中に於ける大学の地位についての考へは朱子と同様である。素行は二程・朱子が大 素行は大学の解釈に当つて、テキスについては、「幸経之一章無…錯簡、学者読」之玩」之、 知」有11聖人之学、是朱子有」功1於聖門1也」 唯可、在一

無、窮、聖学之要、頼」大学」可」以知」也」と尊崇し、なほ大学の思想と聖学・聖経に於ける その地位とを 要約して次 素行は大学を、「学者所」以為。学之綱条、不、過二大学」(中略)其経唯二百五字、其辞平易、而万世用不」尽、人々学

の如く述べてをる。

愚謂。六経之文字甚多。夫子之言語。見:,経書,者亦不、少。而如:,大学。自:,明徳,論来。以:,格物致知。為:,修道之極。 以言治平一為言效験之極。修言之於身。行言之於家。用言之於国。達言之於天下。不以繆不以悖。 無、疑不、惑。文字尤約。

而放」之弥;;六合。其始終本末綱条無」不」尽。故昭如;日月。経;緯乎天地。貫;,徹乎古今。

大学経一章。不」可」動:1一字。不」容」増:1減一字。是聖人出:1至誠無息之教。而無:1虚假牽合之致:也。

六経皆大学之明証也。天下古今之学。天下古今之治。不」出;此一経。不」由」此則無;善治。外」此則為;異端。学者之

精力。在、尽,此一経。」

読書之序。先以,,大学。徹頭徹尾之工夫。在,,這裏。而後以,,中庸。清,,読此二篇。而後可,知,,聖賢問答応接之条理。

故論孟次」之(「句読」読言大学」法)

体に於ける大学の占める地位は頗る大であると言はねばならない。 と。素行は孔門儒学の正系の最もよるべき夫子直伝の経典は論語大学にありとし、 てをる。素行が如何に大学を心読玩索し、学の本質の何たるかを会得し来つたかが知られるであらう。素行の思想全 両書相互に呼応照合すべしと言つ

なれば則ち王公より以下庶人の子弟に至るまで、皆小学に入らしめて之に教ふるに灑掃応対進退の節と礼楽射御書数 の文を以てし、 からば大学とは何か。朱子は大学を大人の学と解した。即ち章句の序に次の如く述べてをる。古は人生れて八歳 その十有五年に及べば、則ち天子の元子衆子より以て公卿大夫元士の嫡子と凡そ民の俊秀なるものと

じ、教は大小緩急の節序を異にする。小学に於ては道徳的事項を授けて徳性の本原を涵養し、大学に入る基本をつく **諸篇があるのみで、小学なくして大学の書のみあるわけはない、大学は小学に対する大学ではないとして、大学につ** 目的精神を述べたものである。とゝを以て大学は大人の学と解し、小学と対する意とするである。素行は此に反対し り、進んで大学に於てはその理を教へ義理を講究して治平の道を学びその功を完くする。大学は古の大学校の教育の て、大学に入る成童では此の経伝を能くし得る筈がない、且つ古来別に小学の書がなく、たゞ内則・曲礼・弟子職の **厄至るまで、皆大学に入らしめて之に教ふるに窮理正心脩己治人の道を以てする。勿論道は一つであるが、年齢に応**

大学者。学之大也。学以1,聖人之教1為1大。自明而至1明1明徳於天下1是也。唯天為1大。唯堯則1之。大哉聖人之道。

洋洋乎。発言了物。峻極。於天,也。(「句読」)

いて次の如き解を下してをる。

称:|大学|也。」(「句読」)と言つてをる。即ち、大学の書は聖教の極、その綱条次序、学の至大至公の道を明にしたもの べきものとの言に対し、未だ審ならず其の意軽しとなし、次の如く批評して曰く、 なる次序や教育の階悌と見做さない。従つて素行は、程伊川の大学は初学徳に入るの門、古人学を為すの次第を見る であるから、内容の価値上の見地から此を大学と称したものと解してをるのである。素行は大学を学を為す方法の単 故曰::大学:矣。 案行は又、「此書者。聖人之大経。則;天地。通;古今。達;上下。 天下之達道也。 自;小学;至;大学。 更不」可」離。 権謀術数之書。虚無寂滅之教。紛二紛於天下。而皆不上以二大学一称4之。唯以二聖人之道一為」大。故其教

書,終,此書、聖家之堂室門戸、可,以升,可,以窺、豈初学之輩入,徳之門乎、聖人論,学、無,如,此深切著明、因,此 而非」得,大学之実、此書聖人教」人之始終、人之所,以為,人、天下国家之用、 無、不、尽、故聖学始,此

書、而考」論語、則聖人之言行可以第、如:1中庸孟子、既伝:二三、而其説不」可」比:1大学論語:也、

と。大学は聖人の大教、学の始終、初学より大成に至る迄終始此に由らざるはないのである。

和二年の随録とも言ふべき「章数附」巻貞の中の霜月廿四日夜の戸田山城守亭で行つた大学の義の講義の手控の自記 素行が晩年に誌したものゝ中には、「大学」を「大人之学」とする朱子の解を一見肯定した如き箇所がある。 即ち天

に次の如くある。(此の「章数附」の以下の引用文の箇所は未刊)

案大人之学也大人者天子諸侯凡在位之人也此篇以;;天子;為¸大人故有;;*明;;々徳於天下;ゞゞ平之等之語;也太學

小学者一己一人之勤也礼楽射御書数等之学皆一人匹夫所」学 一然則占之大学校者自、天子至;諸侯;其

明明徳 親民 止、至善 皆是在位天子諸侯之所」可;;專勤;之学也乃是平;;天下;之明教天下万民之親天下之至善也

明徳之義親民之説皆対::大学之大字,甚著也尤可、謂::天下諸侯之学,也……

併し此の引用文からも明瞭にわかる如く、「大人之学」といふ朱子の註をとつたのも、 字義の上だけで 所謂義理に於 ては朱子とその趣旨を大に異にするものである。此は以上の素行の解と牟盾するどころか、その思想を更に徹底明白 何に解したかが、更に明白に察することができよう。 と同義で、「大学」等に使用する「大」の字義は何かについて 次の如く記してゐるのを見れば、 にしたといふべきである。此はやはり此の「章数附」にある同月同月頃の自記に、大学の明徳は大徳、峻徳、天徳等 素行が「大学」を如

大 孔子曰管仲之器小

案大者指:1何処1乎集注朱子云不、知:1聖賢大学之道:故局量褊浅規模卑狹不、能:11正、身修、徳以致:1主於王道:

哲学 第二十九輯

楊雄云大器猶規矩準縄先自治而後治、人蘇氏信,此說

程子云香而犯礼其器小可知為天器

楊子云夫子大二管仲之功而小,其器一蓋非二王佐之才,雖「能会」諸侯正「天下其器不」足」称也道学不明而王覇之略混而

為以一人成夫子旣曰、器是器可称也

案大者治;;平天下;之義也管仲之才而不、能、推;;及之天下;是其器之小也孔子曰如有;;用、我者;其為、本周乎是其規模之 大也如言規矩準縄「者是器之式也不可言以」大小論『之如言朱子大学之説「者唯是修」身底之義也(本引用文の訓点全で自筆原

本のまし)

素行の「大」といふ解は全て平天下にかゝる意がある。大学が明徳を天下に明にすと言つて、一経あげて学者の極功 たる平天下をその規模とし枢軸として論ずるが故に、書名を「大学」と冠したと解してゐるのである。

る。天地の至公底が学の正善の根拠準則である。素行によれば天地の至大至公の則を人間界に如実に具現した人格的 が、素行の所謂古学といふのは仁斎・徂徠の古義学、古文辞学とは異なり、文献学的研究の立場を基礎とするもので はない。素行のそれは思想的・精神史的立場に基くのである。素行の標準とする所は天地であり、実在そのものであ キハ、其微ヲ尽スヿヲ不」可」得也。人物ノ用亦然リ」「以」天地ソノ則ヲ立玉ハザレハ、聖人ノ則モ私に可」落也。」と ヲ以テ規矩トスル」が故である。それ故に素行は「近ク天地ノ道ヲ尽ストキニ、聖人ト云氏、其象法ヲ観察セサルト 表現が聖人である。聖人の聖人たる所以、聖人の人倫の規矩たる所以は、「聖人何ヲ以テノリトスト云ハ、聖人ハ天地 宋学を排して、孔子の原始儒教の精神に帰れと主張した所から、素行は仁斎・徂徠等と共に普通古学派と称される

Ŕ ない。 れば、 言つてをる。孔子に帰れといふのは、素行にとつては天地実在の道に随順せよといふことである。従つて客観的に見 素行がかく断言する根拠は大学の経文と論語に表はれた孔夫子の言行とが内容に於て寸分の間隙もなく一致すると見 以テ是ヲ正シ徴サレハ必私見ニ落」つるのである。聖人の意を、文獻学的実証法を以て明にしようと言ふよりは「天 只以,,本経正言,為,,標準、直反覆研究、 法たる下学上達とは換言すれば格物致知であると素行は看得したのである。大学に於て古来学者の論議の焦点は格物 るからである。客観的に言へば、素行の大学の解釈は論語を以て大学を解釈したと言ふべきであらう。孔夫子の為学 にある。経の格物について伝のないことにつき素行は次の如く断定してをる。 地人物ヲ以テ是ヲ正シ徴」みる体験の実証法によつて 解釈しようとするのである。 素行は 「大学一章者、 てし、直に聖人立教の精神を心読せよと言ふのである。 論語 意見臆説を立てゝ聖経を解するのではない。素行の宋学を排する所以は兹にある。「聖人ノ書ヲ考テ、天地人物を 素行の経書の研究は孔子の意を、「認識されたるもの」認識」といふ 文献学的方法を以て 探求してゐるのでは 素行は聖経の読書法について、「古来解」於聖経、只以」文字之訓詁、 一篇者、 夫子之言行也」と称するが、大学が直に夫子の言といふのは文献学的には勿論問題であらう。 以可」知川其要」也」と言つてをる。素行は文字の解釈は前人の努力の註解を以 併しながら、 自己の体験を以て 主観的に思索すると 言つて 於三義理、見者詳味、 是経解之実也、(中略) 直夫子之

朱子以小格」物伝。 是格」物無;意義。而一章皆格」物也。更非;闕文。(「句読」) 為,闕文。竊按。大学一経。悉是格」物。 而別無」可」建」言、 且経文至、格、物。 便直謂、在、格、物。

下に述る素行の大学に対する解釈を見る時、古典の味読から生れる思想の新創造といふ精神史上の最も興味のある問 聖経全篇の内容の悉くは格物の跡を示し、格物の実内容であるから、 殊更伝を必要とせぬと素行は見るのである。以

題にふれるであらう。

意。正心・脩身・斉家・治国・平天下の八条目である。つぎに大学の三綱領・八条目に対する素行の解釈を見ること 大学の道の要とする所は、明徳を明にす、民を親む、至善に止まる所謂三綱領と、それの細目たる格物・致知・誠

によつて、素行の聖学の極を明にし度いと思ふ。

本節については、「四書句読大全(大学篇)」「山鹿語類巻三十四聖学二致知(読子子学し)参照

三、大学の三綱領

――学の標準―

大学の三綱領とは、大学開巻の

大学之道。在5明11 明徳1。在5親5民。在5止11 於至善1。知5止 而後有5定。 定而后能静。 静而后能安。 慮。慮而后能得。物有:1本末。事有:1終始。知、 所:1先後。則近」道矣。

から出てをる。

心に得るありで、徳は内心に得て之を行ふ方面より 命ぜる名称で、 道と徳とは 同一理を異なつた方面から 見た名称 は天下古今共に由る所の路、徳とは天下古今同じく得る所の理、徳あつて始めて道は行はれる。徳は道を行つて而して 天より理を賦与されて禀けてをる。それが性である。性は仁義礼智信の徳を生得する。朱子は徳を道と区別し、道と で、其の実は一である。父は慈にして子は孝と云ふ時、慈孝は道であるが、此の道を心に得て父となつて慈を行ひ、 朱子は三綱領に、宋学の性即理、性善、復性の形而上学を基礎として新しい解釈を下した。人は何人も生れながら

筈であるから、此の拘蔽を除いて、発する所に因て之を明にして其の初めに復るのが明徳を明にするの意である。即 子となっては孝を行ひ去るに至る実行の根源力を徳といひ、且つ徳は理の顕現力の様相とするのである。天下の一理 己の明徳が発揮された以上、それを他に推し及し他も亦その旧染の汚を去らしめるのが民を新にすることである。止 ち明明徳は人間固有の明なる本性を発揮することである。 ずる者」と言つてをる。たゞ気禀に拘せられ人欲に蔽はれて、時には昏いが、本体の明は息むことなく何人にもある ととである。 如きものではない。 徳の物に応じての現れ方の諸相である。 ち人にあつては物慾の拘蔽による。 を人は天禀するが故に、万物に応じ仁義礼智信の徳を人は発し得る筈である。 **脩己治人を行ふ標準が至善である。三綱領の意は、要するに天理の極を尽して一毫の人欲の私無からしめることであ** まるは必ず是に至つて遷らざるの意で、至善は事理当然の極である。本体の理そのまゝが至善である。 しておきさへすれば、 大学に言ふ明徳とは本体の徳で、章句に「人の天に得る所にして虚霊不味、以て衆理を具へて万物に応 慾を除けば、除く程完全に発現する。従つて徳の修養とは人慾に打ち克つことである。 事々物々に応じてその行為は則にあたつて宜しきを得る。親民の親を朱子は新と解し、既に自 四徳といつても四つの徳が内に別々にあるわけではなく、 しかしてその天賦の徳とは完全万具で後天的に育成発達完全ならしむといふ 明徳は先験的に衆理を具へてをるのであるから、 此が現実に顕現し得ざる所以は、 それは性の渾然たる一 明徳・新民の 性に復る 此を明に 気以

宋儒 の性善性即理 の説を聖学の罪人、異端の沙汰としてその誤謬を批判した素行は朱子と対立的な見解をとる。素 る。

是れ即ち学問に外ならない。

德_者得_也知_至而有`,所`,得;,於内,也、得;,之_於_心,行;,之於身、謂;,德-行、其德公-共、而通,天_地不、惑;,万-物,者、

行は徳を礼記楽記の徳は得なりの説に従つて次の如く解する。

天-徳明-徳也、浅-露薄-軽而不、踏:実-地、則不、可、謂、徳、(「要錄」)

是を明徳といふ。かくの如く徳は、習熟と密接不可分離にあり、それは可能性でも潛勢力でもなく、具体的現実力で 素行は朱子の如く徳を先天的のものとせずに後天的のものと解する。尤もかく得るといふ能力は可能性として先天的 ずして」といふ如き形容が附加されるのである。それ故に明徳は朱子の言ふ如く、人生来固有するのではなく、究尽 処」来、是徳也」と言ひ得る。かくの如く徳は修為を俟つて積まれるもので、 その極に至つて尽せる徳は 聖人の徳で は実地に活用されないが、それを幾分でも時に習つて体得すればそれなりに行ひ得る所がある。それが徳である。従 は心身に積まれ熟せる能力の程度なりに道を行ひ得る。従つて徳は時間的生成的のものである。知識は口耳の知識で ものではない。下地を育成し発達せしめて得られ蓄積されたものが徳である。徳は道を行ふ根源的顕現力である。人 的に明なる徳といふものは現実には存しない。修為の功によつては明徳に至り得るといふ可能性が与へられてをるに あり、一時的偶発的なものに対して、恆常的、形成的、傾向的なるものである。それ故に至熟の徳には「思はず慮ら に禀受してをることは言ふ迄もない。併しそれはあく迄下地である。下地そのものは天性的に自足完成された至善の とゞまるのである。至り尽せる徳を何故明徳と称するのであらうか。 せざれば得られざるもので、物慾を去れば本来的にその明を顕はすといふ底のものではない。 つて吉徳、凶徳、 大徳、 小徳の熟語の用例の示す如く、徳の字は大小吉凶に通じて使用され、「凡一箇事物、亦有言得 素行は「明字尤有」味」と言つてをる。 究め致らしめずに本来 又素行

行は徳を綜合的実践力と解してをるから、徳は才知を欠くべからざるものとして包摂せねばならぬのである。知仁勇 俗に徳は言行篤実の所謂狭義の道徳的人格力の意にとられ、知又は才と対立せる概念として解される。併しながら素 が徳を解するに「知至つて」と言つた意は何であららか。

得る此の性心の働きを以て学べば 万物に通じて知は明となる。 事物に明なるには事々其の道を尽して学ばねばならぬ。此の知るといふ能力は性心固有の働きで、万物を感通知識し 明寸ハ惑、惑寸ハ不」正。人心不」明寸ハ邪正不」分、邪正不」分寸ハ不」通」となる。事物に明なることが、明である。 不」可」惑。知恵不」明ユエ、其惑ヲ不」知也。」と。従つて「明ト云ヿヲ能覚了スル、 **感為也。学フトキハ惑自弁ツベシ。学問ハ自己ノ知ヲミカイテ、己ヲ明ナラシムルニアリ。** 惑ふて進むを得ない。 は中庸の三徳である。実践といふことは、語默動静物に従ふと言ふ如く、事物に対処することである。事物を対象と して事物を制することである。 してそれとの応接の間に於ける行為である。行為の正善を得、宜しきを得て節に中るといふことは事物に惑はず通達 知る時は惑ふことなく進み得る。 かく期し得る第一歩は事物に通じ、 道に迷へば人に道を尋ねねばならぬ。 知は生得的に 万物に通暁してゐて 明であるのではな 事物をよく知る所から始まる。 是学者弁」惑ノ第一義也。 知恵明ナル寸ハ邪正是非 しか 道を知らざれば、 れば 「学是可」弁」 物不以

しからば、知と徳との差別はどうであるか。 天徳1ト云ル、何モ是ヲ知テ而後得ノ謂也。夫子曰知及」之、仁不」能」守」之雖」得」之必失」之トノ玉フ。 ѕ ѕ ぃ 又多方ノ篇ニ、惟聖問」念作、狂、惟狂克念作」聖ト云リ。大学ノ道ハ明」明―徳ト云リ。中庸ニハ、誠、身ニハ明 が善ト云リ。 天下ノ間不」思シテ得ルモノナシ。是性心ノ全体知識ヲ以テ本トスルカ故也。 コソ徳ヲシルヘケレ。不」学シテ徳ト云ヲ可」知ヤ。孟子、知皆拡而充」之ト云ル、皆知ヲ以先トスル也。 知識セザレハ不」可」通。聖ノ字ヲサトシトヨミ、 孟子ハ思則得」之、不」思則不」得ト出タリ。是以案スルニ、我性心ニ能心得ルヿヲ以徳トス。其心得ンヿ 聖人を上知ト云、三徳ヲ論スルニ知ヲ先ニシ、 洪範ニ、思曰」睿、睿作」聖上出タリ。 聰明睿知達日中庸 サレハ学テ

い。以上の如く徳は知から始まる。知徳何れを先とするかの問に素行は次の如く答へてをる。

知い是ヲ明ニスルノ云也。徳ハ止」至一善ノ心ナレハ、知テ是ヲ身ニ修行シ、内ニ守テ得ル処アルノ名也。 終温潤ノ和気発スルガ如シ。是ヲ徳ト云也。サレハ、知テ明之」トイヘモ、悠久ニシテ不」息ニ不」至ハ、誠 リト云ハ、自証自悟ノ謂ニアラズ、知テ守」之、久シテ其言行ニウツリ 得タルノコ也。玉ヲミカクコ久シキ 寸ハ、 誠ノ徳アラサレハ、 誠ノ知ニアラズ。 易ニ、聖人久;於其道;而天下化生スト出、至誠無」息以テ天徳ヲイエ 得ル処ア ノ徳ナ

是徳ノ悠久ナルニアラズヤ。

をる。 と任務。 をなさず、明弁睿智なく事物に通ぜざる人格といふのは明なき愚直底、所謂善人にすぎずして徳の実を得たるもので う。故に道徳上よく問題となる知徳の**優**劣といふことは素行にあつては問題にならない。 はない。徳は才知を兼ぬるべきである。知と才につき素行は次の如く述べて、とかく学者の誤解し勝ちな点を正して と。素行が徳を知至つて内に得る所有ると定義した綜合的な思想を思はねばならない。こゝに知の行動に於ける地位 実践の学の人生に於ける真義、徳の 実を知ると共に、実学者としての 素行の徹 底せる面目が、窺へるであら 知のない徳といふのは意味

ヅカ 知 是知ノ致ルヿ不」尽力故ト可」知。 道不」明ヲ以テ、 ハ体也。 サルヲオト云也。 オハ用也。 大木ヲ删テ小材トシ、 知ヨリ発スル処ノ広キヲオト云也。木ノ堪」用者曰」材、 周公ノ才ヲ夫子称シ玉ヘリ。 俗学是ヲ以テ材ハ人ノ害ナリト云ヿ、尤可、笑也。只聖学不」明ユエ、徳ト云、知 曲木ヲケツリテスグナランヿヲノミ求ルニ至テ、 又、才難トノ玉フ。 是才ノ用タルコ尤明也ト云へた、 材才ト通ス。 ツイニ材ノ 用ヲ失却ス。 故其知能物ニ渉テツマ オヲ尽ノ

ځ 従つて「聖人之徳必兼」才、徳有」得11於中,而才能著11於用1」と素行は言ふのである。 内に徳あればその実践力

オト云、

共二其実ヲ不」知也。(以上「巻三」)

は外にあらはれて事物にわたつて效験ある。效験なければ徳ではない。故に「聖人人ヲ論シ玉フニ、其功業ヲ成就ス ルヲサシテハ徳ヲ称シ玉フ。其日用事物ノ間ニオイテハ、悉知ヲ以テ称ス。殊更ニ学者ノ急務ハ致」知ヲ以テ本トス。 (中略) 学者只知ヲ究 ムルヲ以テ本トセハ、ツイニ学不」厭ニイタリ、仁ココニ可」得也。仁是力行ノ名、 乃徳ノ至著

也。」(巻二)と。以上の如き考へから素行は大学の明徳について左の如く説いてをる。

寸ハ、乃明徳也。日用ノ間、事物ニクラカラズシテ、此ヲ天下ニ用ヒ、万代ニオコナツテタガワサルノ徳ヲ明 大学ニ明徳ト云ヘルハ、至大至公ニシテ私ナキ道ヲサシテ云ヘリ。 懲,無-道。選;,建明徳、以蕃;,屛周、以昭;,周公之明徳。晉君宣;其明徳於諸侯。齊奏至言,在,衞戒佗書。 ル 明徳ノ字義皆至大至公ノ道ヲシメスノ言也。然ルニ宋明ノ諸儒自己ノ意見ニナラツテ、 性心ヲカキリテ云ニアラス。尤性心至善ニ止ル 明徳惟馨朝 以テ性心虚霊不昧ヲサ 左女十八年昭」明-徳一 ナ ŀ 云

かくて素行は明明徳に対して「四書句読大全」には次の如き註を下してをる。 明徳者。聖人之徳。用:諸天下万世。而人物各得:其処:也。明者。公大著明也。

徳

ス

トスルコ甚不」正也。(同上)

者。 人物得以安」也。

学問思弁也。問。實思。明弁。

明徳より発する行為は万物をしてその処を得しめ、修身より平天下に至る迄精粗表裏大小明徳以て覆ひ、人物由つて 以て立ち、古今上下大小通用すべきの達道であるから、修身斉家治国平天下一として明徳に則らなければ其の至大至 となる。従つて明徳は「自11格致1以至11平天下『不」繆不」悖。無」疑不」惑。為」道為」法為」則。」(「句読」)るのである。 公の実を得ない。明徳の発し及ぶ所、動いて世々天下の道となり、行ひて世々天下の法となり、言ひて世々天下の則

間

るの謂い すとい 故に明明徳を以て学の標準となすのである。 惑はず、 (同上) と。素行は「在」明二字。 すれば実はそれは自証自悟である。 は燭さざるなし。 は語類に明にすといふことを次の例を以て説明してゐる。明徳は一箇の光明底のもので、 んとしてやまざる目標であり理想である。 を庶民に徴し、 とを繰り返し力説してをる。 ふ明にすとい 此である。 素行は此を明にすといつても物慾がない 明にすとは学問思弁であり、之を明にする法は「明」之。不」可以私。在下就「有道」以正、 諸を三王に考へて謬らず、諸を天地に建てゝ悖らず、諸を鬼神に質して疑無く、 火がともれば暗くなる。 ふ動詞が学者にとつては力点がおかれねばならぬ要所である。 明徳の效験は平天下に端的にあらはれる。 しからば私意安排無く至大至公なる実証法如何、 学者甚著」力之要也。 従つて客観性なく私にして正しからず。明にすとは、 火を吹きつければ再び明るい。 日常規範として見ならひて自己を正す皇極準則である。 此を学ぶ者の側から言ふならば、 からとて直に知が明かになるわけはなく、 明之。 不」以以格物致知。 (性と政治との関係については後段詳論参照/素行の引用文からも繋せられる学術の客観) 火を吹きつけることが物慾を去つて性に復 明徳は倦まず厭はずし それ中庸に云ふ、 則不」可」謂」明」之。」(同上) 名徳を自己固有の本性とする朱子 聖教に則つて客観性を求め 把火の如し。 自己の本性をのみ摸索 百世以て聖人を俟つて 諸を身に本づき、諸 従つて明徳を明 て 悠久に至ら 飯而 物を照す時 とい 好占

がま」に認識し、 Z するにありとなしてをるのを知るであらう。 である。 カ> 明徳といふ具体的にして且つ人格的表現をとることはその義深長なるものがあることを一言して、此については くの如く明 かくて学は倫理実現の基礎である所以が明となる。 明徳は聖学の大綱大義である。以上の所から、 その認識の上に規範を立てゝ則るといふ学術的精神であつて、 その客観性を追求するといふことは同時に、 しかして至大至公といふことを単なる法則的表現ではな 素行が学の学たる所以の第一の標識は至大至公を追求 それは後段の格物に連絡して行く 実証を重んじ、 事物をある

後に論及することにしよう。

次に「在親民」に素行は次の註を下してをる。

親。仁愛也。親」民者。為1人君1止1於仁1也。治平之要。在11博施済1衆。安1百姓。所謂汎愛1衆子11庶民1也。(句読)

治国平天下は聖学の極效である。素行は又次の如く言つてをる。

自ラ守リテ不」願」他、一事一行ヲカタクスルモノハ、チイサキ所ニテ人ノガヒニモ利ニモナラズ、一分斗ヲ見テ取 人ノ徳ハ大ニシテ天下万物ノ 用トナリ、国土万民ヲモラサザル 大悲ノ才ヲカネズシテハ、実ニ聖学ト難」言也。唯

問 むるにある。そこに明徳の実たるしるしがある。明徳を明にすとは明徳を天下に明にすることである。併しそれは学 力として動き流れてをらねばならぬのである。此の倫理的責務感が不断に学者の人格の筋金として貫いてをらねばな る。この国家社会の人倫生活から自ら生ずる自他の二境を分たぬ仁愛感恩の情、政治的関心と責務感が学を志す源動 その認識圏内に包摂してゐる。大知大徳は天下を自己自身の責任上の事とする。明徳の明徳たるは万物その処を得し 聖人の道は一人一己の安んじ楽むことではなく、天下をしてその処を得しめるにある。大知の眼界は常に広く天下を らぬことを強調せねばならぬ。学者の志気は治国平天下にありといふ、その志の有無がいかに学そのものゝ重要にし 5 の功業の見地からのみかく言ふのではない。学を為すそもそもの動機そのものが、こゝに発してをらねばならぬと リマハスモノナルユニニ、小人ト云フ。小人ハ悪人ノコトニアラズ。小智小才ノコトナリ。(〔揆話!) ふことを意味するのである。我々の生きるとは人と共に生きるのである、五倫の間に生き生かされつゝあるのであ

素行は此の自覚覚他の精神から他に及ぼすのを、朱子の如く親民を新民と解することは、民の一人一人の本性の徳

て死活的要因なるかは、学者の看過しがちな所である。

を明ならしめることになるから、堯舜すら猶ほ諸を病み、天下の人民の悉くをして明徳を明にせしむる如きは不可能 治道の用を以て、個人的にではなく、それを全体的に即ち政治的に実現することである。即ち伝に云ふ、君子は其賢 を賢として其親を親とし、小人は其楽を楽として其利を利とすることである。民其の所に安んじて其利を利とするこ とである。為政者の明徳が治平の道を践み行ふ時、上下其の処に安んずる。かくなし得る所以は、本仁愛の心に出づ であつて、かく期するのは異端の説なりと難じてをる。親民は万民を其の処に安んぜしめる意であつて、 るのであるから、 聖教は親民を本とするといふのが素行の解義である。民をしてその利を利とする所に安んぜしめる 政教礼楽の

點に政治の倫理的價値を强調する考へは素行の最も重要なる政治倫理思想であるが、此については別論に譲る。 のもの、 至善に止るとは要するに物慾を去つて尽さざるなく其の性に復る謂である。陽明によれば、至善とは純乎たる天理そ 此の至善の実内容は、 言つても二者性善・復性の根拠に立つ点は揆を一にする。素行はかゝる形而上学の上に立たぬ、学を俟たずして性は 親民の標準で、その関係は規矩の方円、尺度の長矩、権衡の軽重に於けるが如しと言つてをる。朱・王その差ありと らず、天性本然の良知純粋なる発現のまゝなることが至善に止るの謂である。至善は我が心中にある、 て善悪是非を知る、 止者。必至;於是;而不」遷之意。至善者。善之極。無」不」尽。而無;得而可,称焉也。親賢楽利。各安;其処。所謂明; 明徳於天下」也。(同上) 次の在止於至善に対する素行の註は左の通りである。 私慾の間雑なき人の天性で、至善はかの霊昭不味なる明徳の本体即ち良知である。良知は学ばず慮からずし 良知の軽重厚薄随感随応、変動とゞまらざる発見がそのまゝ至善で、その間に議擬増損あるべか 朱子によれば本然一定の則、程子の所謂其の義理精微の極、得て名くべからざるものである。 至善は明徳、

本来明白至善とか、学はず慮らずして善悪を知る良知良能とかいふことを素行は自己一家の形而上学的私見で、事実

に即した説ではないとする。しからばその善悪とは何によつて認知すべきであらうか。

凡善悪ト云明暗ト云ハ、皆ソノ物ト事トニ付テイヘル名義也。事物イマタアラワレサル寸ハ、明暗善悪云ヘキ処ナ

シ。(巻一)

善悪の分岐は性心にあるのではなく、事物の間の用法を詳にするや否やにあるので、事物を究めねば善悪及びその用 木があつて建つ。良匠の木を使ふにはいづれをも捨てない。節ある木曲がれる木もなければ家は建たない。 ずして感ずるまゝに直覚的に行動して当を得るといふ如き霊覚人にあるのではない。 学んで始めて知は明となる。具体的情況に処するにはその具体的情況を審に思慮せねば当を得ない。 此れ悪と定まつたものがあるのでもない。 善は事物に対処してその宜しきに従ふことであつて、事物との関聯に於て言ひ得ることである。 りあつても、 弁するのは知である。併しその知の明は陽明の如く、学ばず慮らずして能くし得る天性完具のものではなく、 ではない。其の惑ふ所を指して悪とする。しからば惑ふ惑はざる、事物に応じて情を品節するや否やにある。 法を明にするを得ない。 ワキマエテ、其用法ヲ詳ニスルヲ聖人ノ教トスル也。」「用法不」調ハ 善モ善ナラズ、道モ 道タラサルコ、 「一物一事トイへた、 それを用ふるに其の処を失へば、其の用を全くしない。善の実は其の家を建てるにある。「善悪ヲヨク 用法ヲハナレテハ、性心斗ニテ其事ノ通スルヿアラズ。」(巻三)と知るべきである。 至善に止まるの理如何について素行は例をあげて具体的に次の如く説明する。 朱・王の如く人慾即悪とすることはできぬ。 家を立てるには曲直節大小の材 情の欲に感じて動く、 又本来的に此れ善、 その事物を究め 世以然リ」 上木ばか しかれ 事物を 是れ悪 かく明

ノ間各々至善アリ。 コノ至善ヲ尋ネテコレニ止マルトキハ、必ズ心定マル也。父母ニ孝行シ、君ニ忠ヲ致スヨ

問

学

定マルトキ リ、一日ノ間千ペン万クワノ用、一色一色皆其ノ事ノ至善アルモノナレバ、事ニツイテ工夫シテ能クコレヲタダス トキハ、ソノ事ニツイテノ至善アルモノ也。至善ヲキハメテ行フトキハ、則チ止マルコトヲシルユヱニ心定マル也。 シテココニ ハ、是レ安ンズルト云フニアラザル也。諸事ニツイテ此ノ格物アルベケレバ、ココニオイテ格物シテ其ノ至善ニ止 ハヤスキ也。例へバ今日大風大イニ吹キ火事ニ気遣多シト云フ時ハ、火事ニツイテソノ法ノ至善ヲタダ 止マルトキハ、則チ心定マリテヤスシ。ソノ法ヲ格物セズシテ、 押シテ 天命ナリト云ヒテヤスンズル

積極的に立てゝ行かねばならぬ。至善に立つて始めて万事は安定存立し得る、依て素行は至善に止るにつき又次の如 ければ、 至善は極であつて、 人間界の統一的実存は成立しない。規矩の曲直方円に於けるが如しである。至善によつて日用を正し、 極則として至善は則となる。 物有れば則有り、事に接するには、至善を以て定則として立てな 且つ

マルコトヲ求ムルニアルノミ也。(「掇話」)

小目ヲ立テ則トスルニ同シ。父ニツカエ君ニ奉公イタスニモ、其綱大義ノ実ヲ定メ、是ヲ至極ノ則トイタシテ、其 小目ヲ詳ニス。故ニ善ノ至レル処ヲワキワメ、是ニ止ルヲ則トス。故ニ止;於至善;ヲ以テノリトス。況ヤ八条目ノ 大学ニ止、至善ト云、 ソレヨリ次第ヲ論スル也。 中庸ニ率」性中」節ト云、是聖人ノ則也。 タトエハ一年ハ三百六旬トキワメタル、是其極也。是ヲキワメテ其中ニ十二月廿四節ノ 止,於至善,ト云ハ、事物其極レル処ヲ立テ則トシテ、

に止らなければ、部分的には小善は立つとしても、全体的には善となり得ぬのが実人生の難しとする所である。 至善に止るは事に接する実践の極則である。しかして至善は極であるからして全体的見地、綜合的立場である。 至著 至善

悉小條目ノ則アリ。(巻四)

る。 現の道を明にするのが学であるといふことである。学者には熱烈なる理想主義的精神が漲つてをらねばならぬのであ の理 は事々物々につき綜合的に究めねばならぬ。至善に止るにありといふのは、換言すれば又我々の現実生活をして最高 学問的能度とは常に此の理想的綜合的立場に立脚して思索し実践せねばならぬことを意味するものである。 「想的価値を具現せしめることである。それは学は最高の理想を追求せねばならぬことであり、その最高の理想具

て、 ある。而して明徳は 親民至善を管する。従つて 素行は「人生日用彝倫之際。不」出!接物応事。其大原。以」明!明徳! 民を親むにあるから親民は国家天下の総括であり、事に応ずるには至善に止るに在るから、止至善は事物格致の総括で あり、此を以て標準とする。「明1明徳1。是大学之総括。」(「同上」)と素行は言つてをる。しかして物に接するには是れ 地に似て人物に徴みるべからず、或ひは人物に及んで天地に則るべからず、是れ一人一家一国の私意臆説にとゞまつ **ゐても、国に用ふべからず、国に用ゐても天下に用ふべからず、或ひは当世に用ゐても後世に用ふべからず、或ひは天** その動機に於て親民至善を志さないのではない。明徳を明にすることなきが故に、其の説公共ならず、或ひは家に用 親」民、止;;至善;次」之。親」民止;;至善。不」以;;明徳。則不」得;;聖人之教。」(「句読」) とする。異端の 教を 設けるのも らつる效力は徳を積む如何に応ずる。又、民を親しむの仁愛の情に燃え、至善に止まらんとする意慾が熾烈であらら と、知なくんば実際に於て親民・至善たらずしてその志は実を得ない。故に素行は「凡明:明徳」者。聖学之大綱領、而 以上で素行の学問の大綱と学の標識、学の目的精神は明かであらう。しからば三綱領の相互の関係はどうであらう 親民・止至善の実を具現し得ない、是れ学明ならずして明徳を明にしないが罪である。明徳は親民至善の大綱で 徳は道を行ひ去る根源力であり、至大至公の実践主体性の実である。人の為す業は悉く徳の現れで、その人物に

次序節目相具はる。以上の所より素行が朱・王に比し実践的見地から知を致すことに如何に重点をおくかが知られる 相包括して、大学の道は此の三を出でず、其事物は亦八事を出ぬ、八事は此の三を以て其の実を得、三は八事を以て 於天下1者」の句を以て始まる。是れ明徳は親民・至善の 標的でそれを 包括する故である。三綱領は下文八条目を皆 であらう。知を明にする学あつて始めて倫理は実現される。学者の典型を素行に見るのである。

う。素行は事物と三綱領について次の如く説いてをる。 素行の以上の解釈を見る時、事物といふことを 如何に重視し、此の 言葉を頻繁に 使用してをるかに 気づくであら

明徳ノ章、三ツトモニ在ト云フハ、明明徳ハ自ヲ守リ、新民ハ人ヲスクフ、至善ハ事物之用也。人ヨリハ先ヅ自分 **ヲ正シ、次デ人ヲ正シテ、而ル後ニ事物ヲ至善ニイタス也、** コノ三ツ修スル処ハ別々ノ如クニシテ、 自分ノ明徳ハ

素行は「物に本末有り、 事に終始有り、 先後する所を知るときは、 則ち道に近し。」 の大 学の句を、 本節首節明徳 物与4事。而尽4其則4」(「句読」)と解してをる。事物とは何か。物とは「天地之間万物也、天地亦物也、况人物乎。」 の節と相対して意深重なりとして「此一節。発言明上節之綱領在言物事之際。而提言起格物致知之義。(中略)聖教在上詳言 民ニアハザレバ明カニスベキリナシ。 人事ノ間、皆又事物ヲハナレザルト可;心得;也。(「揆話」)

物有:|人物之事:|」で、物について 事が生ずる。「物ニツイテ事アリ、事ハ 物ヨリ出テ、物ハ事ニアレハ、物ノ字ヲ事ト く、「人心少無」不」応言接於物、語默動静、行往坐臥、 俗にあのもの、このもの等といふ「もの」で、物質の意と混同誤解してはならぬ。「天地有二天地之事。人 視聴言動、皆是物也」(同上)と言ふ如き、事象・事件・ 作用 関

(「語類」)と言ひ、天・地・人・物、凡そ森羅万象悉くを指して物と言ふのである。それは固定せる対象物ばかりでな

之総括。親、是物。至善是事。故明徳之一節。因;」此一節; (物有本末の)詳;]致之;也。此条目。因;]明徳之一節。得;] 大学之道:也。異端俗学。被:聖人之責? 亦在:此際:也。 聖教之実。在\明11事物。明11明徳。是明11明徳於事物之上1也。止11至善。是止11事物之至善1也。明11明徳。是致11事物

殊更に力説するのは何故であらうか。しかして事物と認識行動主体との関聯は如何。かくて八条目に問題を移さう。 と。以上の如く三綱領を致す方法はたゞ格物致知に窮まる、その格物致知とは何か。素行が他の諸儒と違つて事物を

正を加へた。なほ本稿は以上の三章の次に四八条目団格物份致知の三章が続くが、紙幅の関係上、四以下は改めて次輯に譲ること で既に實任校了までに至つてゐたが、戦災は本輯の発行を中絶するの止むなきに至つた。僅に残つた校正刷りに今回少しく加筆訂 ゝする。(昭和廿七年冬) 本稿は帝国学士院の研究補助金に対する同院に提出した昭和十八年度研究報告の一部である。本誌第廿七輯に掲載の予定